身代わり王女の恋物語（なろう版）

みきまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わり王女の恋物語（なろう版）

【Ｎコード】

Ｎ９１２７Ｚ

【作者名】

みきまろ

【あらすじ】

故郷の村を焼かれ、生きるために国を作り王となった男と、歴史ある大国の王女として、和平のためその男に嫁ぐことになった王女との恋物語。◆以前グループサイトに投稿したものに、（こりずに）大幅に加筆修正したものです。ヒロインの登場は第二話からになります。

1　大陸歴五四三年～オーレリア村～

「ラウル、起きな！　朝だよ」

村の朝は早い。
夜明けとともに祖母に起こされて、ラウルは眠い目をこすりながら家の隣に建てた鳥小屋へと向かう。
十数羽の鶏たちは、ラウルが来たのに気付くと、小屋の入口につめかけて騒ぎ出した。

「ほいよっと。今出してやるからな」

ひっかけるだけの錠をはずし、扉を開ける。

「うわっ」

ばさばさばさーっ
羽毛が舞う。
鶏たちはギャッギャッとけたたましい音を立てて、庭に駆けて行った。

「やれやれ。
お、今日はたくさんあるな」

鶏たちが出て行った小屋の中には、新鮮な卵が産み落とされていた。
持ってきた籠に卵を拾って入れ、小屋の掃除をする。
さらに庭で虫や草をつついていた鶏たちにえさをやり、卵を台所に置いて畑の見回りに出た。
道端に咲く、名もない野花（のばな）。

村人が丹精込めて育てている畑の野菜は、日の光を受けてつやつやと輝いている。
その畑の向こう、柵で覆われた場所では、朝露に濡れるやわらかな草を山羊(やぎ)が食(は)んでいる。
ラウルは村の一番外側まで来ると、村を守る防護囲いが壊れていないか、夜の間に獣に荒らされていないかなどを調べた。
そして、村の端にある両親の墓に道で摘んだ花をたむけ、祖母の待つ家へと足を向けた。

朝日に輝く、のどかな村の風景―
この村に生まれて十四年。毎日見てきた景色だったが、それが永久に続くものではないことを、ラウルは知っている。
戦争だ。
小国の諍いから始まった戦争は、周りの国を巻き込み、だんだんと大陸全土へ広がりを見せていた。
軍備のために少しずつ税が重くなり、大人たちは徴兵される。
初めは遠い国のことと思っていたが、ラウルの住むここオーレリア村にも、少しずつ影響が出始めていた。
今はもう、１５歳以上の男はいない。
年寄りと子どもだけになったこの村で、自分にできることは何か。
そう考えて、彼は村の見回りを自らの日課としていた。

「おはようさん、ラウル」

もうすぐ家だ、朝飯はなんだろうと思いながら歩いていると、隣人に声をかけられた。

「おはよう、ダンじいさん。
東の縄が少し緩んでたから、直しておいたよ。」

「おお、ありがとう。いつも見回りご苦労じゃの。
最近このあたりも物騒でなぁ。囲いを強化しようかと話しておる。
わしらだけじゃとてもおいつかんて、その時は手伝いを頼むよ」

「わかった。ティエリーと一緒に行くから、声かけてくれ」

「助かるわい。よろしくな」

手を振って、ダンと別れる。
家の木戸を開けたところで、今度は先ほど話に出てきたティエリーがいるのに気付いた。

「やぁ、ラウル」

「よぉ。おはよう。こんな朝早くからどうした」

「いや……」

ラウルの家の裏にある大木の陰から出てきたティエリーは、何か言いたそうに口ごもった。
朝から待ち構えているくらいだ、よっぽどのことがあったのだろうと思うが、無理に聞きだすのも悪い。
ひとまず、ラウルはダンに頼まれた件を伝えることにした。

「あのな、ダンじいさんが囲いの強化を手伝ってほしいって言ってた。
後で声がかかると思う」

「あぁ、そうか。
うん。それはいいんだ。それは……」

顎に手を当てて地面を見つめるティエリー。
明るい茶色の髪が、さらっと頬にかかる。
真っ黒で頑固な直毛のラウルの髪とは大違いだ。
違うといえば、大雑把なラウルと違い、優しげで人当たりの言いティエリーは、村の女たちにとてももてた。
戦争で、若い男をとられた村の婚姻事情は深刻だ。
ラウルより一歳(ひとつ)上の十五とはいえ、村で一番年かさの男であるティエリーは、すでに女たちに狙われていた。

もしかして、そっち方面の悩みだろうか。
だとしたら俺は役に立てないぞ。

妙に焦りつつも、ラウルは年上の友を気遣う。

「ティエリー？　どうした？」

「……なんでもない。心配かけてごめん。
そうだ。もうすぐ剣が打ちあがるんだ。
出来たら一番に知らせるからな」

「うん、楽しみにしてる」

手を振って、ラウルはティエリーが家に帰るのを見送る。
ティエリーの父親は、村で唯一の鍛冶職人だった。
なかなかにいい腕で、時には打った剣を都に納めることもあった。
けれどこの前の冬に、その腕を買われて徴兵されてしまった。
村で剣を必要とすることはないが、鋤や鍬は使う。
壊れた農具の修理ができる人がいなくなり困った村人を見かねて、
ティエリーが見よう見まねで修理を始めた。

父親の手伝いをしたこともあったようで、その出来栄えはなかなかのものだった。
すると、そのうちに剣を作ってみたいと言い出した。
ティエリーは父親が残した道具や材料をかき集めて、修理や畑仕事の合間にこつこつと鍛え始めた。
そうして作った初めての一振りが、もうすぐできあがるという。

「できたら、触らせてくれるかな」

足元の枝を拾って構える。

ひゅっ

何とも頼りなげな軽い音がした。

ティエリーには自分の道がある。
俺には、村の見回りや手伝いくらいしかできることがない。

ひゅっ

ラウルは、枝を振るう。
何度も、何度も。
胸にくすぶる思いを断ち切るように――

「ラーウル、どこ行ったんだい！
朝飯だよ！！」

祖母が呼ぶ声が聞こえた。

「はぁい、今行く！」

ラウルは枝を放ると、祖母の待つ家に駆け戻った。

「わああぁぁぁぁぁ！！！」

ある日の夜、村に火が放たれた。
突然の出来事に、村人たちは逃げ惑った。

「うっ、こりゃ……何事じゃい。
ラウル！　ラウル、どこだい！」

「おばぁ、こっちだ！　早く！　逃げよう！！」

ラウルも祖母の手を引いて、家を飛び出す。

事の発端は、昼間村にやってきた、見慣れぬ5人の男たちだった。
皆一様に疲れ果てた顔をして、どこの国のものかわからない、ちぐはぐな軍装に身を包んでいた。
自分たちは、戦地から逃げてきた。
どうしても家族の元に帰りたい。
一夜の宿と食べ物を恵んでほしい、と言った。
親切な村人は、快く彼らを受け入れた。

「ひゃはははは！
気楽に暮らす馬鹿どもめっ
おまえらに戦争の苦労がわかるか！」

ところかまわず剣を振り回し、もうすぐ収穫を迎えるはずだった作物を荒らすのは、昼間子どもに会いたいと泣いた男。
他の男は、家々を回り、金目のものや食料を強奪している。
逃げながらも、ラウルは男たちの様子を目で伺う。
……一人足りない。

「きゃあぁぁぁぁ！
やめてっ、やめなさい！」

「へへっ
気の強い女は嫌いじゃねぇよ。
ほれ、逃げてみろ。逃げてみろよ」

悲鳴を聞きつけて振り向けば、いないと思った男が見事な金髪の女の手をつかんで、引きずり回していた。
つかまれているのは、ダンの孫で今年十七歳になるアディだ。

「や、やめろ、孫に手をだすな」

「うるせぇ、じじい！　引っ込んでろ！」

どかっ
男がダンを蹴り倒す。
腹を押さえたダンは、地面に横たわって動かなくなってしまった。

「おじいちゃん！　あぁ……」

「くくっ。
女ぁ。さっきまでの威勢はどうした。

そうさ、弱いもんは強いもんに逆らっちゃいけねぇんだよなぁ」
男は、下卑た笑いを顔に浮かべると、アディを物陰へと引きずって行った。

「おばぁ、村の墓地まで歩けるか。
そこで待ち合わせよう」

「ラ、ラウル。
おまえ、どこへいくんだい。まさか……」

「村の人が襲われてるのに、ほっとけないだろう」

「や、やめておくれ。
アディ《あのこ》はかわいそうじゃが、おまえまでいなくなったらわしは……」

「おばぁ、後でな！」

「ラウル！！！」

祖母が叫ぶ声を背中で聞いて、ラウルは男が消えた方向へ向かう。
途中、倒れたダンを抱き起して、手近な塀に寄りかからせる。
腹は痛そうだが、大丈夫、命に別状はなさそうだ。

「ダンじいさん！
アディのことは俺にまかせろ！
村の墓地で待っていてくれ」

「あぁ、ラウル……ラウル……頼んだぞ……」

弱々しく上げられた手を、ぎゅっと強く握ってから、ラウルは駆け出した。

くそっ

あの男、どこへ行った。

近くの家の裏にはいなかった。

炎に照らされる村の中を、必死に走る。

親とはぐれた子や道端で放心している村の女などに、墓地へ向かうよう声をかけながら、武器になりそうなものを探した。

「ちっ

こんなものでもないよりましか」

落ちていた鎌を拾ったその瞬間、

「いやあああぁぁぁぁあ！！！！！」

すぐそばの小屋の中から叫び声がした。

「アディ！」

夢中で目の前の木戸をけやぶる。

そこで見たのは、殴られたのだろうか、頬を腫らしつつも男を睨みつけているアディと、彼女にのしかかり、醜い尻をさらす男の姿だった。

「てめぇ！　何してやがる！」

怒りで、目の前が真っ赤に染まった気がした。
無我夢中で、手に持った鎌を力いっぱい男の肩めがけて振り下ろす。

「ぎゃあぁぁぁぁ！」

鎌を肩に突き刺したまま、男がもんどりうった。
その隙に、アディの手をとり引き寄せる。

「アディ、早く、こっちだ！
大丈夫？　何もされてない！？」

「あぁ、ラウル、ありがとう。まだ何も……」

がくがくと震える彼女は、それだけ言うのが精一杯の様子だった。

「よかった！　立って、ほら」

衣服を引き裂かれ、大きく開いた胸元に上着をかけてやる。
自分より頭一つ背の高いアディの腕を肩に掛け、なんとか立たせて
逃げ出そうとしていると、

「こんのくそがきがぁぁっ
なめた真似しやがって！！！！」

さっきの男が肩から抜いた鎌をもって、襲いかかってきた。
足元に落ちていた棒で応戦する。

「くそっ、アディ、村の墓地だ！　村の墓地へ向かって！！」

「ラウル、だめ……。

足に力が入らない」
いつもは強気のアディも、恐怖のため腰が抜けてしまったのか。
小屋の隅に座り込んで、動けそうにない。

「くっ」

鎌の切っ先が、ラウルの首筋をかすめる。
棒の先で男の胴体を突いて、少しでも自分たちから離そうとするが、
だんだんと、アディ共々小屋の隅に追い詰められた。
男が鎌を振り上げる。

これまでか。
おばぁ、ごめん。

アディを背中にかばって、ぎゅっと目を閉じた。

「ぐはっ」

「ラウル！」

血しぶきがとぶ。
アディがラウルの背中をつかむ。
どさりと鈍い音がして、倒れたのは――アディを襲おうとしていた
男のほうだった。

「大丈夫か！？」

「ティエリー！　あ……。助かった」

ラウルがほぉっと長い息を吐く。
男は、背中を斜めに切られて絶命していた。
ティエリーの手には、血に濡れた一本の剣。

「それ、もしかして」

「あぁ。夕方、打ちあがったんだ。
明日おまえに見せようと思ってたんだけど、こんなことになるなんて」

軽く振って血を払い落し、ティエリーは剣をラウルに渡す。
そしてアディの体の下に腕を通すと、よいしょと抱き上げた。

「アディ、怖かったな」

「ティル、ティル……うぅっ……」

アディは、泣きじゃくってティエリーの首にしがみつく。
ラウルはといえば、男の死を確認し小屋の外の様子を伺ってから、
ティエリーに向かって顎をしゃくった。

「生き残った人たちは村の墓地に向かってる。
俺たちも行こう」

「あぁ。
その剣はおまえが持っていてくれ。
きっと俺よりうまく使えると思う」

「ティエリー？」

「ふっ
知らないとでも思ってたのか？
毎日こっそり家の裏側で素振りの練習をしていただろう。
それはおまえの剣だ。
おまえのために作ったんだよ」

そうだったのか。
両親が死んでから、一生懸命俺を育ててくれたおばぁ。
いつも温かく声をかけてくれる人々。
俺に懐いてくれる村の子どもたち。
いつかこの手で守れるようになりたいと思っていた。

そんなラウルの想いを、友はわかっていてくれた。

「ありがとう、ティエリー。
大事にする」

「ははっ
初めて作ったからな。強度はわからないぞ。
切れ味は……。まぁ、さっき見た通りだ」

絶命した男の傷口を見る。
ぱっくりと割れたそこは、黒ずんできた血の間に、白い骨をのぞかせていた。
一撃でこの威力。
軍に徴兵されるほどの職人の息子は、確かな技を受け継いでいた。

「急ごう。みんな待ってる」

「あぁ！」

ティエリーに声をかけて、小屋を出る。
剣を持つ手に力を込めて、ラウルは祖母の待つ墓地へと駆け出した。

時は流れ――

「ラウル、そろそろ時間ですよ」

山積みの書類に署名を書きなぐっていたラウルに、ティエリーが声をかけた。

「……ちっ、面倒くせぇな。」

がりがりと頭を掻くと、勢いをつけて立ち上がる。

「あなたね、仮にも王様になったんだから、もうちょっと上品になさい」

「うるせぇな。上品な王様がよけりゃ、おまえがやれ」

あの日。
村を出た二人は、一つの国を作った。
国の名は、村と同じ、オーレリア。
その執務室には、一振りの剣が飾られている。
今見れば、材質こそ良いものであれ、決してほめられた出来ではない。
装飾の一つもなく、重さのバランスもいまいちだ。
しかし、この剣がここまでの二人を支えてきた。

「ようやくこぎつけた和平ですからね。へまをしないでくださいよ」

「はっ

自分の名前くらい書けらぁ」

執務室の扉が開く。

彼らの悲願が、目の前にあった。

2　大陸歴五六〇年～デナーシェ～

デナーシェ王国の第一王女、リュシエンヌが死んだ。
遠乗りに出かけ、飛び出してきた子兎を避けようとして落馬したのだ。
運悪く、リュシエンヌが落ちた先には、藪の影になってわからなかった崖があった。
全身を打った彼女は、そのまま亡くなってしまった。

「リュシエンヌ……。こんなことになるとは……」

デナーシェ城の地下にある、王族の墓所。
リュシエンヌの兄で、若き国王でもあるリシャールが、妹の棺を愛おしそうに撫でている。

リシャールが知らせを聞いたとき、彼は国境近くの街道にいた。
そのときはまだ、妹が怪我をしたようだ、としか聞かなかった。
怪我と聞いて思い浮かべたのは、リュシエンヌではなく、もう一人の妹リゼットだ。
今年十八になるリゼットは、何歳(いくつ)になっても落ち着きがなく、城を抜け出してはそこここに擦り傷を作って帰ってきた。
大方、今回もお忍びで出かけて足でもひねったのだろう。
そう思った。
何せ、裁縫と読書が趣味であるリュシエンヌと違い、リゼットの趣味は狩りだった。
森に分け入っては、兎や鳥を獲ってくる。
そんなことをする王女なんて、どこにもいない。
城の料理人は新鮮な食材を喜んでいたが、リシャールにとっては頭の痛い行動だった。

だから、彼は国境での仕事を終えてから城に戻った。
仕事とは、街道の安全確認である。
通常なら警備隊のものにやらせることだったが、この道は、リュシエンヌが一週間後の婚儀の日に通る道だった。
そう。
リュシエンヌは、一週間後に婚儀を控えていた。
十五年続いた戦争で大陸一の大国となったオーレリア国の若き国王と。

――十五年戦争。
今ではそう呼ばれる戦争が終わって早四年。
大陸中を巻き込み、たくさんの命が落とされた。
唯一の中立国であったデナーシェも、戦争とまったく無縁でいられたわけではなかった。
リシャールたちの父、すなわち前国王は、戦争が終わるまでずっと心を痛めつづけた、やっと終結した二年後に病に倒れ、はかなくなった。
さらに一年後には、王の後を追うように、王妃も亡くなった。
それゆえに、二十七歳という若さでリシャールが即位した。

十五年戦争の戦勝国は、戦争のさなかに建国の宣言をし、ばらばらになった国々をまとめてあっという間に力をつけた、オーレリアだった。
オーレリアは、勝利を宣言するとすぐに、敗戦国に戦争の賠償を求めた。
敗戦国は、大小合わせると二十以上にのぼった。
それらとオーレリアが個別に条約を結んでいては、どれほど無理難

題をふっかけられるかわからない。
敗戦国の国王たちは、ない知恵を絞って話し合い、結果、デナーシェを頼ってきた。
すなわち、唯一の中立国であるデナーシェが、敗戦国のまとめ役となり、オーレリアと交渉をしてくれないかと。

デナーシェに、それを引き受ける義理はなかった。
しかし、戦勝国（オーレリア）と敗戦国がごたごたしている間に、戦後二年がたち、父王は倒れ、いまだ落ち着かない大陸の様子に人心が荒れ始めていた。
即位したてのリシャールは、敗戦国であろうと多くの国々に貸しを作ることを目的とし、代表を引き受けた。

和平交渉の日。
使者を通じてある程度のやり取りはしていたが、リシャールは内心不安だった。
敗戦国側がこれ以上出せないと言って提示してきた金額は、賠償とするにはあまりにも安すぎた。
さらにデナーシェからは、和平の象徴として、デナーシェの王女との婚姻をあげていた。
地盤を固めたいリシャールにとっては、妹を嫁がせてでも、オーレリアとのつながりが欲しかったからだ。
そんな見え透いた手を、オーレリア側はどうとるか。

交渉の為、デナーシェ城にあらわれたオーレリアの王は、若かった。
たぶん、リシャールと同じくらいの歳だ。
髪は黒。マントも黒。
引き締まった体を包む軍衣も黒で、瞳だけ真っ青だった。
気に入らない。

一目見て、リシャールはそう思った。
今は王を名乗っているが、所詮戦争のどさくさに紛れて起った王だ。
どこの馬の骨かわからない。
その証拠に、言動は粗野で、上品さのかけらもない。
三百年以上の歴史をもつデナーシェの王城において、少しも委縮する様子もなく、自信に満ち溢れた表情(かお)をしているのも気に入らない。
さらにいえば、もっと気に入らないのが、その瞳だ。
森の湖を思わせる青い瞳は、はじめは挑むようにリシャールを睨んできた。
なんだと思って睨み返したら、つぎは嘲笑するように細められた。
そして最後は満足そうに、リシャール(こちら)を見つめてきたのだった。

こんな奴に大事な妹をやるのか。

国の為、己の治世のためとはいえ、リシャールは少し後悔した。
オーレリアの王のほうから難癖をつけてくれればいいとさえ思った。
しかし、オーレリアの王は、安すぎる賠償金にさえ文句一つつけることなく、和平に調印(サイン)をした。

そうして迎えた婚儀。
二人いる妹のうち、どちらが嫁ぐかという話になった。
すると、当然のようにリュシエンヌが自ら嫁ぐと言った。
王族の務めであるし、年も自分の方が近いから、と。
リュシエンヌは、二十二歳であった。

婚儀の準備は着々と進んだ。
あの日の連絡を聞くまでは。

「兄様、あの……」

「！」

リュシエンヌの棺の前でリシャールが物思いにふけっていると、背後から遠慮がちに声をかけられた。
驚いたリシャールが振り返る。

「あぁ、リズ。おまえか……」

墓所の入口には、悄然とたたずむリゼットがいた。

「ごめんなさい。お邪魔だったかな」

「いや、ちょうどいい。話がある」

「話？」

リシャールが国境から帰ってきたとき、妹たちのどちらの出迎えもなかった。
もう夜なのに城にいないのはおかしと思ったら、つきっきりで怪我人の看護をしているのだという。
そんなに酷い怪我だったのかと、リシャールは旅装を解く間もなく見舞いに行こうとした。
しかし、妹の部屋にたどり着く前に、老体をかがめて平身低頭するオズバンド侯爵に遭遇した。
オズバンド侯爵家は、デナーシェ王家に継ぐ血筋と権力を持ち、父王の代から家族ぐるみで付き合いのある男である。
なぜそんなことをするのかと聞けば、未だ誰にも秘密にしているが、王女は怪我をしたのではなく死んだのだという。

『死んだ！？　どちらが？』
そう尋ねたときのリシャールは、兄としてではなく王として頭を働かせていた。
『……リュシエンヌ様でございます』
『そうか……』
『私（わたくし）がついていながら……。
誠に申し訳ありません』
遠乗りには、リシャールが国境に向けて旅立った日に、リュシエンヌとリゼットで連れ立って出かけたのだという。
付き添いは、オズバンド侯爵家。
リュシエンヌたちは、姉妹の最後の思い出にとオズバンド侯爵に遠乗りをねだり、オズバンド侯爵も快く引き受けて、家をあげて警護にあたったという。
しかし、事故は起こった。
『此度（こたび）の責任、どうとるつもりだ』
『はっ。陛下の御心のまま、どのような処分も受ける覚悟でございます』
たとえ王女たちの望みだったとしても、髪の毛一筋とて傷をつけたら大問題だ。
それどころか今回は、王女の一人が死んでしまった。
責任をとって、侯爵本人は断首。
家督を取り上げ、一族の国外追放あたりが妥当か。

『そうか。追って、沙汰を知らせる。
とりあえずは、婚儀をどうするかだな』
腕組みをし、思考をめぐらせる。
答えはすぐに出た。
『陛下……。
僭越ながら、まだ発言を許されるのであれば、方法は一つしか』
『わかっている。それしか方法は、ない』
和平の調印では、“デナーシェの王女”としか約束しなかった。
しかし、そのあとリュシエンヌの絵姿を、オーレリア側に送ってしまっていた。
国同士の婚姻では、盛大な披露宴やパレードが行われることが恒例だ。
その際に、花嫁の髪の色や瞳の色に合せて、調度品や花が選ばれる。
リュシエンヌの髪は黒。リゼットの髪は栗色だった。
さらに婚儀一週間前ともなれば、互いの名前入りの記念品なども作られているはずだった。
いまさら、下の妹が嫁ぎますとは言いにくい。
『リゼットを、リュシエンヌの身代わりとして嫁がせよう』
「兄様？　あの、話って？」

「あぁ。
リズ、一週間後、おまえが第一王女（リュシエンヌ）としてオーレリアに嫁げ」
「……！」
リュシエンヌの棺の前。
そう告げた兄に、リゼットは驚く。
「それは、姉様のふりをしてってこと？」
「そうだ」
兄の言葉にリゼットが戸惑ったのは一瞬だった。すぐにこくりとうなずく。
いくらおてんばとはいえ、リゼットもデナーシェの王女だ。
ある程度予想をしていたのだろう。
もしかしたら、リシャールが帰ってくるまでに、オズバンド侯爵と話をしていたのかもしれない。
「急な話で悪いな」
「ううん。私も王女だもん。
この婚儀がどれくらい大事なものかはわかってるつもり。
でも、もしあちらの方に気づかれたら……」
「そこはおまえ次第だ。うまくやってくれ」
「……わかった」

けなげに微笑む妹を抱き寄せる。
胸の前で合された両手が、わずかに震えていた。

「リズは、リュシィが落ちたところを見たのかい？」

髪を撫でながら聞く。
昨日の夜、城に着いてすぐにオズバンドに遭った。
その後は対策に追われ、妹（リズ）の顔を見たのは今が初めてだった。
彼女はリシャールがリュシエンヌの死をどうするかを決めるまで、城の奥に身を隠していたのだ。
リュシエンヌの死を隠し、リゼットの存在を隠し、王が戻るまで待った。
オズバンドの采配だった。

「私、姉様の前を走っていたの。
悲鳴が聞こえて、慌てて戻ったときには、姉様も、姉様の馬の姿もなかったわ。
オズバンド侯爵様が駆けつけて、みんなで見つけたときには、もう……」

「そうか。このことを知っているのは、リズとオズバンドと、オズバンド家の従者だけだったな」

「うん。
あの、オズバンド侯爵様はどうなるの？　遠乗りについてきてくれた従者たちは？
兄様、まさか口封じなんてしないわよね？
私が、私が悪いの。
姉様を遠乗りになんて誘ったから……」

遠乗りは、リズが言い出したことだったのか。
肩を震わせ、涙を流す妹を抱きながら、リシャールは得心がいった。
さして好みでもないのに、この大事なときに遠乗りにでかけたリュシエンヌ。
よりによってリシャールがいないときに出かけたのは、普段リゼットの奔放ぶりにいい顔をしていなかったからか。
姉と遠乗りなんて、リシャールに言ったら許してくれないと思ったのかもしれない。
でも、どうしても最後の思い出に行きたい。
オズバンドは、そんなリゼットの心情を察して、付き添いを引き受けた。
陽光の下(もと)、楽しそうに馬を走らせる二人を、年老いた侯爵は微笑みながら見つめていたことだろう。
こんなことにさえならなければ、姉妹のいい記念になったはずだった。

「処罰は、まだ考え中だ。
しかし他の貴族の手前もあるから、そう軽いものにはできないな」

「……そう。そうよね……。あぁ……」

苦しそうに息を吐くリゼットを、リシャールは優しく撫でる。
ふわふわの綿毛のような髪と妹のぬくもりが、少しずつ彼の心に兄としての悲しみを呼び起こした。

「リュシエンヌ……。
死んでしまったのか」

「……」

リシャールはリゼットを離すと、そっとリュシエンヌの棺に手を掛けた。

「まだ、顔を見てやっていなかったな」

「あ！」

ぎしっと蓋をあけようとして、釘が打たれているのに気付いた。

「なんだ？　どうしてもう封じてある？
通常、埋葬までは開くようにしてあるはずだが」

「あの、兄様。
実は姉様のお顔は、崖から落ちた衝撃で酷く腫れてしまっていて……。
私が、そうしてくれるようにお願いしたの。
みんなに、一番きれいなお顔で覚えていてほしいと思ったから」

そんなに酷いのか。

見れば、釘がしてあったのは上半身だけで、蓋の途中に切れ目が入れてあり、下半分は開くようになっていた。
リゼットの懇願を受け、リシャールは足元だけを確認する。
見覚えのあるドレス。
リュシエンヌが気に入ってよく着ていたものだ。
そのまわりには、彼女が好きだった花が敷き詰められていた。

利発で、しっかり者だったリュシエンヌ。
若くして即位した兄を、いつも励まし支えてくれていた。

あふれそうになる涙を、ぐっとこらえる。
泣いている場合ではない。

「リズ。もう一つ頼みがある」

「はい」

「リズは”リュシエンヌ”としてオーレリアに嫁ぐ。
そして”リゼット”は……リュシエンヌの代わりに死んでくれ」

「……はい」

兄と共に墓所を出て、リゼットはリュシエンヌの部屋に行く。
これからは、リゼットがリュシエンヌとして過ごすためだ。
扉を閉めると、ほぉっと息をついて、革張りの白いソファに身を沈めた。
もうすぐリシャールがリゼットの死を発表する。
遠乗りにでかけて怪我をしたのはリゼットだ。
怪我が悪化して、死んだのもリゼット。
第二王女（リゼット）は死んだことにして、六日後には予定通り第一王女（リュシエンヌ）が嫁ぐ。

「お疲れ様です、リゼット様。
リシャール様のご様子はいかがでしたか」

「ユリア……」

最も信頼のおける侍女が差し出したお茶を、身を起こして受け取る。
薫り高いお茶は、疲れた心をふんわりと溶かしてくれた。

「リゼットではなくて、リュシエンヌよ。
これからは、私のことはリュシエンヌと呼んでちょうだい」

「あ、はい。申し訳ありません」

ユリアはリゼットたちの乳母の娘であり、幼いころから共にそだった乳兄弟である。
リゼットにとっては、いつも自分の幸せを願ってくれる、優しくも頼もしい、もう一人の姉であった。
もちろん、隠し事など何一つできない。
そう、隠し事なんて……。

「兄様、泣いてたわ。
涙こそ見せなかったけど、あれは絶対泣いてた。
兄様に……本当のことを言ってあげられたらいいのに」

「リゼ……リュシエンヌ様。
それは……」

3　リュシエンヌの私室にて

兄様に、全て言ってしまえたらいいのに。
涙をこらえる兄様を見るのは、本当に辛い。
そして兄様が棺に手をかけたとき……。
あのときはとても焦った。

リゼットは、ユリアが淹れてくれたお茶を両手で挟むように持って、物思いにふける。
思い起こせば一週間前。
姉の部屋を訪ねたときから、すべては始まった―

ことん
と、何か音がした気がして、リゼットは夜更けに目が覚めた。
永世中立国を宣言し、調和と質素を重んじるデナーシェ国において、国王の住まいたる王城もさして大きいものではない。
物音は隣のリュシエンヌの部屋から聞こえてきたようだった。
婚儀を二週間後に控え、姉様も眠れないのかもしれない。
そう思ったリゼットは、上着をはおって寝台から出る。
主が起きだした気配を察してか、侍女の一人が手に明かりを持って扉を開けた。
『一人で大丈夫。姉様の部屋に行くだけだから』
蝋燭の明かりがなくとも、満月に近い今夜は月明りで十分に明るい。

手燭を断って姉の部屋の前までくると、ぼそぼそと中から声が聞こえた。

ん？　姉様は一人ではないのかしら。

月はもうすぐ真上にのぼる。
こんな夜更けに王女（あね）の私室に訪れる者が、自分以外にいるのだろうか。

こんこん

控えめに扉を叩く。
息を飲むような気配がしたのは気のせいか。

『姉様、リズです。リゼットです』

『……リズ……』

やはり、リュシエンヌは起きていた。
扉の間から顔を覗かせ、辺りをうかがうようにする。

『眠れなくて。
ちょっと話してもいい？』

小さいころは、怖い夢を見たといってはリュシエンヌの寝所に潜り込んでいた。
最近はあまりなかったことだが、もうすぐ姉がいなくなると思うと無性に甘えたかった。

『リズ……そうね。

私も話したいことがあるわ。入って』

リュシエンヌは一瞬迷った後、扉を細く開けて妹を招き入れた。
そして、後ろ手で扉の鍵をかけた。
そんなことは今までしたことがなかったので、リゼットは驚いて姉を振り返る。

『リズ……あなたもう気付いているんでしょう？
昔から勘が良かったものね』

『気付いて？　って、え？　何を？』

リュシエンヌは、一人納得してしっとりと微笑む。
リゼットは何が何やらよくわからないが、姉には何か隠し事があったらしい。

『マルス様、出てらして。妹のリゼットよ』

リュシエンヌは、リゼットの肩越しに室内へと呼びかけた。
すると続き部屋の陰から、一人の男性が現れた。
部屋の中央まで来ると片膝をついて、リゼットの前で優雅に礼をする。

『……お初にお目にかかります。
オズバンド侯爵家長男、マルス＝ドゥ＝ヴィア＝オズバンドと申します』

そう名乗ったのは、淡い金髪が色素の薄い顔を覆う、線の細い男性だった。
マルス＝ドゥ＝ヴィア＝オズバンド。

聞き覚えのあるその名に、リゼットは記憶をたどる。
確か幼いころの、姉の許嫁ではなかったか。
戦乱の中、いつのまにか立ち消えてしまったと思ったけれど。

『リズ。私が二週間後に嫁ぐことはわかっているわ。
だから今だけ、わがままを許してちょうだい』

『姉様』

リュシエンヌが、目線でマルス様に立つよう促す。
マルスはリュシエンヌの手をとると、手の甲に唇を寄せて口づけた。
嬉しそうに微笑むリュシエンヌ。
その顔は、デナーシェの第一王女ではなく、一人の恋する女性だった。

あぁ、そうか。
許嫁ではなくなったとしても、2人はどこかで出会ったのだ。
そして惹かれあったのだろう。
戦争さえなければ、誰もが祝福する2人としてそのまま幸せになることもあったろうに。

『わかった。今夜見たことは誰にもいわない。
でも姉様、それでいいの？　好きな人がいるのに、お嫁に行っちゃって、本当にいいの……？』

リゼットの純粋な問いかけに、リュシエンヌとマルスは目と目を合わせて淡く微笑む。

『私も、王族の義務はよくわかっているわ。周辺国との婚姻と不思議の力で、私たちの国は中立国を守ってこられたのだもの。出発の

日までに気持ちの整理はつけるわ』

目の奥に強い意志を感じさせて言い切るリュシエンヌは、今はまた王女の顔をしていた。

そう、デナーシェが戦乱の中、中立を保ってこられたのは、長い歴史の中でうまく諸国にまぎれこませてきたデナーシェの血と、長い間護りに心血をそそいできた結果得た（といわれている）不思議の力によるものだった。

でも、恋する心はそんなに簡単に整理などつくものなのだろうか。恋を知らない私には想像もつかないのだけれど……。

納得のいかないリゼットは、さらに姉に問う。

『本当にいいの？』

リュシエンヌとがうなずき、隣に寄り添う恋人がせつなげに口を開く。

『元々は私の一方的な想いだったのです。それをリュシエンヌ様に受け入れていただけただけでも　身に余る光栄。これ以上何を望むというのでしょうか。

今夜ここを訪れたのも最後のお別れをさせていただくためです』

そうは言っても、からめあう手と手が二人の思いを如実に語っていた。

また、いつも側に控えているはずのリュシエンヌ付きの侍女の姿も見えないことから、姉の意志で彼を招いたことは明白だった。

『マルス様、私のほうこそごめんなさい。

あのときあなたの手をとらなければ、こんなに苦しめることはなかったのに』

リュシエンヌ様……と、マルスの口が動いた。
しかし声にはならず、次の瞬間、彼の体がぐらりとかしいだ。

『マルス様……！』

リュシエンヌが、悲鳴に似た声で恋人の名を呼ぶ。
右膝をつき、肩で荒く息をするマルスは、苦しそうに胸元を押さえていた。

『だ、大丈夫です。いつもの発作ですから。
それよりそろそろ戻らないと侍女達もしびれを切らしているでしょう。
これ以上あなたにご迷惑をおかけするわけにはいきません』

マルスは慣れた手つきで上着の隠しから薬を取り出し、口に入れた。
水差しを取ろうとする姉を制して、リゼットが水を注いでマルスに渡す。
リュシエンヌは心配そうに眉根を寄せて、マルスの背中をさすっていた。

『姉様、彼は一体……』

水差しを戻して姉の顔を伺う。
リュシエンヌは、ゆるゆると首を左右に振って、何も答えなかった。
月明りが、冷や汗をかくマルスの横顔を照らす。
元々白かった顔色は、今は蒼白といっていいほどになっていた。

『リゼット様……私の命はあともって半年と医師に言われています。
どうせ死ぬのならと思いを告げた私を、リュシエンヌ様は受け入れてくださったのです。
大丈夫。もうすぐ死ぬ身ですから、リュシエンヌ様の思いが残るはずもありません。
リュシエンヌ様、あなたなら素晴らしい王妃となられることでしょう。
静養先の別荘で、あなたのご活躍をお祈りしています』

薬が効いたのか、少し顔色のよくなったマルスは立ち上がって姉様の手に口づけた。
リュシエンヌが旅立つ前日に、彼も別荘に行くのだという。
恋人が、違う男と結婚するために出かけるのを見送るのはつらいのだろう。

『マルス様。あぁ……。
なぜそんなことをおっしゃるの？
私は同情であなたと過ごしていたわけではないわ。
あなたの死を側で待つなんて耐えられない。
だからこそ、今回の婚姻を受けたのよ。
私は皆が思うような強い女じゃないわ。
あなたの死を乗り越えられる自信がないから、他の国へ逃げようとした卑怯な女なのよ！』

『リュシエンヌ様……！』

強く抱き合いお互いの名を呼ぶ2人。
そう、嫁ぐのは別にリゼットでもよいのだ。
それを、リュシエンヌは年齢的にも釣り合うのは自分だといって、進んで嫁ごうとしていた。

その裏にこんなことがあったとは、リゼットは想像もしていなかった。
いつも落ち着いていて、しっかり者の姉。
その姉が、男性（マルス）の胸にすがって泣いている。
リゼットは、それほどまでに焦がれる相手に出会えたことを、うらやましく思った。
だから、つい、こう口にした。

『姉様、オーレリアには私が行く。姉様はマルス様と一緒にいてあげて』

言葉にした瞬間、リゼットはこの思いつきがとてもいいもののように思えた。
和平の条件はデナーシェの王女がオーレリアの王に嫁ぐということだと聞いている。
リュシエンヌが指名されたわけではない。

『リゼット！　何を言っているの！』

驚きながらもリュシエンヌの瞳が揺らぐ。
きっと、本当は迷っていたのだ。
最後まで共にありたいと思う心と、最後を看取ることを恐れる心。
今までは国の為という建前で、自分をだましてきた。

『大丈夫、うまくやるよ。
……いえ、うまくやるわ』

あわてて言い直した。
今まで兄と姉の保護のおかげで自由気ままに育ってきたリゼットは、言葉遣いもまだ幼い……というより荒い。

公式の場ではそれなりに取り繕ってはいるが。

『だ、だめよ。
私の絵姿はもうオーレリアに渡っているし、お兄様だって、こんなこと許すわけないわ』

リュシエンヌの髪は、腰まで届くつややかな黒。
リゼットの髪は、栗色だ。
湿気が多いと、自然とくるくるとうねってしまう猫っ毛が悩みの種で、長いとすぐにからまってしまうため、いつも結い上げられるぎりぎりで切ってしまっている。
姉のまっすぐな黒髪があこがれだった。
瞳の色は同じ榛色。
光の加減で黄色く輝くのが王家の証である。

『髪は染めればなんとかなる。
猫っ毛だって、いつも結っていればわからないし。
童顔は……うーん、お化粧すればいいかな。
ユリアならきっと大丈夫よ』

ユリアは、姉の婚姻に合せて、オーレリアについていくことになっていた。
お茶を淹れるのもうまいが、化粧も抜群にうまい。
オーレリアに向かうのは、リュシエンヌとユリアだけの予定であった。
あまりにも心細いのではと思ったが、和平の条件でもあったようだ。
婚姻にかこつけて大人数を送り込まれては都合が悪いのだろう。

『リゼット……』

妹の言葉に背中を押され、リュシエンヌは心を決めたようだ。
『ごめんなさい。私がもっと早く話していれば、そんな苦労を背負わせずにすんだのに』
リュシエンヌがあえて今夜リゼットを招き入れたのは、自分が嫁いだ後、マルスの様子を時々知らせてほしいと頼むためだった。
ところがリゼットの予想外の申し出に、とんだ方向に話が進んだ。
『姉様、それは違う。
間に合ってよかった、と言うのよ』
片目をつぶりながら明るく言うリゼットに、リュシエンヌとマルスは顔を見合わせて、そっと微笑んだ。

「リゼット様、おきれいですわぁ……」
ほう、と見惚れるようにため息をつくのはユリア。
リゼットの死を発表してからの日々は、あっという間に過ぎた。
今日はもうオーレリアに向けて出発する日。
数時間後の出発を控え、髪を染め、正式な身支度を整えた。
ユリアの手による濃いめの化粧をし、ゆったりと微笑む鏡の中の女性は、自分でも驚くほどに姉にそっくりだった。
「だから、リュシエンヌだって」

「あら、すみません」

あの夜のあと、ユリアに事情を話をすると、激しく怒った上で協力を申し出てくれた。
怒りの方向は、主にそれまで秘密にしていたリュシエンヌとマルスの関係にあるようだったが。

「リゼット様がリュシエンヌ様の振りをするなんて、
子猿が人のマネをするようなものと思いましたが、なんとかなるもんですね。
いえ失礼、たんぽぽが薔薇になりたがるようなものかしら、
それとも、亀が月を目指すような……」

「ユリア……」

どんどん例えが酷くなる侍女の言葉に、リゼットはつい半目になってにらんでしまう。

そりゃ、私は姉様とは比べ物にならないくらい、所作も言葉づかいも乱暴だけれども。
お裁縫と読書を趣味とする姉様と、本なんてほとんど読まず、野を駆け回り、兄の目を盗んでは狩りに出かける私だけれども。

いじいじいじ。
耳の横に一筋だけ垂らした髪を、つまんですねる。

「あら、いけませんわ、リゼット様。
リュシエンヌ様ならこんなとき、こうおっしゃいますわ。
『猿もたんぽぽも亀もそのものにしかない美しさがあるわ。
自然が作ったものに優劣をつけようなんて、人だけがもつ卑しさ

よ。
　自然を前にしたら私なんて道端の石ころにも満たない小さな存在だわ』ってね」
……姉様が石ころなら、私は砂粒だ。
リゼットはさらに自信をなくす。
あの夜は、とてもいい思いつきに思えた。
しかし、美貌と知性とを兼ね備え、国民の信を一身に受けていたリュシエンヌの代わりである。
本当に自分に務まるのだろうか。
いやいや、大丈夫。
だってオーレリアの王はリュシエンヌに直接会ったことはないのだ。
絵姿しか知らないのならばれることもあるまい。
リゼットだってデナーシェの姫であることには間違いはないのだから。

「姉様、私、がんばるわ」

鏡の中の自分に話しかける。
化粧をし、リュシエンヌそっくりになった自分が微笑むと、姉に励まされたような気がした。
姉はきっと今ごろマルス様と2人で幸せな時を過ごしているだろう。
残されたわずかな時間でしかないとしても、その幸せを自分が守っていると思うと誇らしい気持ちになる。

鏡の前で百面相をしていたら、扉が控えめにノックされて、リシャールが来たことが告げられた。
他国に嫁ぐ妹を見送るリシャールも、今日は正装だ。
王になりたてのころは、なんとなく恰好がつかなかった重そうなマ

ントや王冠も、すっかり板について堂々たるものだった。

「リゼット……いや、リュシエンヌ。
とてもきれいだよ。どこに出しても恥ずかしくない、我が国一番の姫君だ」

リシャールが、リゼットの肩を励ますようにたたく。
“リゼット”は死に、すでにあの棺に名が刻まれていた。
兄に名を呼ばれたことで、リゼットは、とうとう自分はリュシエンヌとなるのだと実感する。
わかっていはいたけれど、覚悟はしていたけれど、リゼットにも一つだけ後悔していることがあった。
それは、名前だ。
これからリゼットは、リュシエンヌとして生きていく。
“リゼット”という名は、もう一生名乗ることはない。

“リゼット”。
亡き両親がつけてくれた、私の名前。

兄の手をとり、露台へと足を運ぶ。
わぁ、と国民の歓声があがる。
リゼットの死を知り、嘆いてくれた国民たち。
婚儀の前なので、大がかりな葬儀は行われなかった。
しかしそれぞれの家の前には黒い布が掲げられ、弔意を示してくれた。
今はリュシエンヌの旅立ちを祝福してくれている。
例えそれが政略結婚であれ、幸せなものになるように。

リゼット――いや、リュシエンヌが手を振ると、ひときわ大きな歓声があがった。

我らが自慢の姫君を称えて歓声は大きなうねりとなり、国中を包んだ。

この国と民のために。
兄様、姉様のために。
新しい国でがんばろう。

花びらが舞う中、露台を降りて馬車に乗り込む。
中には、すでにユリアが準備万端整えて待っていてくれた。

「リュシエンヌ。元気で」

「兄様も」

馬車が走り出す。
人々の歓声を受けながら、王女は祖国を後にした。

4　追憶

和平の調印から二年。
男は、馬上にいた。

「あぁ、面倒くせぇ」

何度目だろう。またつぶやいてしまった。
今日はデナーシェからの花嫁を迎えに行く日だった。
この俺に花嫁だと。はっ、ちゃんちゃらおかしいな。

オーレリア国王、ラウル＝オーレリアは、馬を走らせデナーシェとの国境に向かう。
そこでデナーシェからの警備兵とオーレリアからの警備兵で引継ぎが行われ、王女は侍女一人だけを連れてオーレリアに嫁いでくることになっている。
本当なら、ラウルも仰々しい馬車に乗って王女を迎えに来るのが礼儀だったが、そんな面倒なことはしたくないと、騎馬で駆けてきた。

「あれから、もう十七年か……」

五人の男に村を焼かれたラウルたちは、ここを立て直すのはもう無理だと判断して、村を捨てることにした。
村を出て、初めに頼ったのは税を納めていた領主の元だった。
ラウルとティエリーが先頭に立ち、村人を引き連れてようやくたどり着いた館は、もぬけの殻だった。
荒らされた室内。

ところどころ焦げた跡がある。ここも焼かれたのだろう。
不安におびえながらも、村人同士で肩を寄せ合って領主の館で一晩明かした。
朝になり、長老を中心に、これからどうするか話し合った。

大陸全土に広がりつつある戦争。
どこまで行っても同じような状況だろう。
それならいっそ、大陸の北にある、永世中立国デナーシェに助けを求めてはどうか。
皆の意見が一致した。

デナーシェは遠かった。
途中の被害の少ない村々で、労働と引き換えに小さな子どもを預かってもらうこともあった。
どの村も男手は少なかったから、ラウルやティエリーは歓迎された。
村でしていたように、柵を補強したり井戸を直したりした。
ティエリーの鍛冶技術は、どこでも重宝された。
立ち寄った村で強く引き留められたこともあったが、たいていは若い衆だけで、故郷の村人全部を引き受けてくれるところはなかった。

オーレリア村の人々は、デナーシェを目指す。

野宿をすることも多かった。
山の中で力尽きた年寄りは、仕方なくその場に埋めた。
村を出て数年がたち、ラウルは傭兵、ティエリーは商人の真似事をして、人々の生活を支えた。
その頃には、一緒に来る村人もずいぶん少なくなっていた。

旅の間に、アディが子どもを産んだ。
ティエリーの子だという。

『おまえらいつのまに？』

『いや、まぁ、なんというか……』

『うふん、ティルったら照れちゃって』

ティエリーは母子をどこか安全なところに落ち着かせようと思ったが、アディは絶対についていていくと言って譲らなかった。
彼女は持ち前の気の強さで、誰に頼ることなく赤子を守りきった。

結果的に、デナーシェはオーレリア村の人々を受け入れなかった。
ラウルは、あのときの悔しさをいまでも忘れられない。
固く閉ざされた門。
同じようにデナーシェを頼ってきた人々で、城下町を取り囲む高い塀の周りは埋め尽くされていた。

『おばぁ、ごめん……』

『いいんだよ、ラウル。
ここに来るって目的があったから、わしらは今まで生きてこれた。
もうおまえも自由におなり。
わしらの面倒をみることはないんじゃ』

デナーシェの塀際で、むしろを敷いて過ごして5日目。
ラウルの祖母は、息を引き取った。

彼は誓った。

絶対この国を見返してやる。

自分たちの都合で戦争を起こし、俺たちを、村人をこんな目にあわせた奴らに復讐してやる……！

ラウルはティエリーと相談して、村からついてきた比較的年長の子どもたちと、デナーシェの城壁前で会った有志で傭兵団を作った。
団長はラウルで、武器の調達や渉外などの細々したことはティエリーが受け持った。
アディは食料や生活物資などのまとめ役を担当した。
三人で力を合わせて、ひたすら生きるために戦った。

『ラウル。
一介の傭兵団としてまとまるには、この団は大きくなりすぎました。
国を作りましょう』

金銭の交渉をする際、若いと馬鹿にされるといって、いつのまにかティエリーはそんな話し方をするようになった。
眼鏡をかけ、落ち着いた物腰で話すティエリーは、年齢不詳でとても胡散臭い感じがする。
ある日、ラウルが冗談交じりにそう指摘したら、親友はこう言った。

『あなただって、あのかわいかった面影は全然ありませんよ。
まったく、こんな筋肉ばかりついて。
少しは頭の中も鍛えなさいね』

『うるせぇよ』

戦争のごたごたで、国の名乗りをあげるのは簡単だった。
国の名前はオーレリア。
故郷の村の名前だった。

どこかの国が放棄した城を根城にして、周辺の国を攻めていく。
少しずつ大きくなっていった国には、助けを求める人々が集まるようになった。
ラウルたちは、その人々をすべて受け入れた。
デナーシェのように切り捨てることはしなかった。
治安や食料のことなど、人が増えるほどに問題も増えて行ったが、
いつでも手を取り合って乗り切ってきた。

お互いをわかりあえる、一番の親友。
オーレリアの王と宰相という立場になっても、それは変わらない。
国が落ち着くと、アディは城下町に孤児院を作った。
ラウルは、孤児院は人に任せて何か役職を、と言ったが、

『そんな柄じゃないわん。
　私は私にしかできないことをやるから、あなたたちはあなたたちでがんばりなさい』

そう言って笑った。

大陸歴五五六年に、十五年続いた戦争が終わった。
オーレリアは、気付けば戦勝国と呼ばれていた。
気に入らない貴族や、民を守らない領主の治める土地を片っ端からつぶしていった結果だった。
ラウルたちを見捨てた領主への復讐も、きっちり果たした。
あとはデナーシェだった。
どうしてくれようかと思っていた矢先に、和平の申し出があった。
大陸の平和のため、諸国と手を結んで協定を結ぼうと。
冗談じゃない。

ティエリーは本気で和平を望んでいたが、ラウルは違った。
乗り気と見せかけてこっぴどく断り、恥をかかせてやろうと思った。
もしくは、馬鹿高い賠償金をふっかけて、溜飲を下げようと思った。
戦装束に身を固めて訪れたデナーシェの王城。
あのとき固く閉じられていた門は、大陸一の新興国の王という立場を手に入れたラウルの前で、あっけなく開いた。

同じくらいの年だろうか。
虫も殺したことがないような、きれいな顔をしたデナーシェの王は、和平の証しに妹を差し出すと言った。

辺境の村の出の俺に、デナーシェの王女！

ラウルは、思わず笑い出しそうになった。

いいだろう。
デナーシェのへの復讐は決まった。

暗い炎を胸に、ラウルは和平に調印した。

国境まであと半刻、という小高い丘の上まできて、ラウルは馬を止めた。
日ごろの鬱憤を晴らすかのように馬を走らせてきたため、後続の警備兵はしばらく追いついてはこないだろう。
久しぶりの解放感に、腕を伸ばして伸びをする。

視線の先には、国境となる森が見える。

城壁の外。

デナーシェの東西を守るように広がるその森は、デナーシェでは“天使の森”と呼ばれていたが、他国からは“魔の森”と呼ばれていた。

一度足を踏み入れたら最後、他国のものは二度と生きてはでられないという、魔の森。

デナーシェの民だけが、その不思議の力を持って、自在に行き来できるという森。

デナーシェの民が持つ不思議の力は、魔の森をなんなく通過できるだけではない。

王族に至っては周囲の者を癒すことができるという。

切り落としたはずの腕が、王族が手をかざしただけで生えてきたとか、瀕死の者を生き返らせたとか、はたまた何代か前の王は首を切られても自分の首をかかえて悠然と歩いたともいわれている。

そのほとんどは作り話だとしても、なんらかの力はあるのだろう。

自分の目で見たものしか信じないことにしているラウルだったが、デナーシェの民の力だけは信じている。

いや、信じざるを得ない出来事があったのだ。

時は戦時中に遡る。

『……っ痛……』

放たれた矢が腕をかすめる。
いつのまにか隊と引き離されラウルは、一人でこの地を駆けていた。
このままではやられる。
敵の手に落ちるか、魔の森へと逃げ込むか。
二者択一をせまられて、ラウルは躊躇なく後者を選んだ。
少しでも生き残れる方を選ぶのが、戦乱の世を生き延び学んだことの一つである。

生きていればなんとかなる。

何かの気配を感じたのか、森に入るのを馬は嫌がった。
鬱蒼と茂る森の中は、馬で進むには適さない。
また、馬を逃がせば敵の目をそらせるかもしれない。

そう考えたラウルは、痛む腕を押さえながら鞍に枝を括り付け、上着をかけてあたかも人が馬の背にもたれかかっているように見せかけた上で、馬の尻を叩いた。
甲高いいななきと共に、馬は猛然と駆けだす。

『すまないな。生きて帰れれば、墓くらい作ってやれるかもしれん』

木陰に体を滑り込ませ、辺りをうかがう。
しばらくして追手が馬の逃げた方へ向かうのが見えた。
とりあえずはごまかせたといえよう。
しかし安心するのはまだ早い。
空馬だとばれるのは時間の問題だ。
助けがすぐにくるともかぎらない。
少しでも身を隠す場所を探して、ラウルは森の奥へと足を踏み入れた。

『誰だ！』

近くに人の気配を感じて、反射的に剣を引き抜いて払った。

『わ……！』

浅かったか。

布を切った感触はあったが、倒してはいない。

ラウルは、かすむ目を細めてなんとか相手を見ようとする。

かなり血が流れたらしく、頭が朦朧とする。

『あの……あなた、ひどいけがをしてるんだ。

大丈夫、ここは天使の森。

私はあなたの手当てをしていただけだ』

天使の森。

ここをそう呼ぶということは憎っくきデナーシェの民か。

どれくらいの時かはわからないが、ラウルは気を失っていたらしい

でなければ腕や頭に布を巻かれ、今まで気付かないわけがない。

不覚……！

もしこれが敵の手のものだったら、首をとられていた。

まだラウルの手に握られたままの剣をちらちらと気にしつつも、声

の主は薬草を足に巻き付け布で押さえていく。

『本当にひどいけが……。一体どうして……』

どうしてもこうしてもない。
苛々とした気分で、ラウルは胸の中で毒づく。
戦争のないお幸せな国の民には、命がけで戦う俺たちの気持ちなんてわかるわけもないだろう。
祖母も友人も失い、頼る国もなく、敵は容赦なく切り捨て、泥水をすすって生き延びてきた。
俺の元に集まる輩をまとめあげ、ティエリーやアディと共に国を作った。
今はその生まれて間もない国を守るために戦っている。
巨大な国となったのはいいが、大きくなれば大きくなるほど、わきが甘くなり、目が行き届かなくなる。
今回もそんな火種を消しに出張ってきて、このざまだった。

ラウルの心中など知るよしもなく、手当は進んで行く。
一通り毒を吐いて気が済んだラウルは、水筒の水で傷を清めている人物の観察を始めた。
ふわふわと揺れる髪は栗色。
背中側で一つにまとめ、細い紐でしばっている。
皮の手甲に胸当て。背には弓矢。
猟師の子だろうか。

ふと子どもの二の腕に、血がにじんでいるのが見えた。
さっきラウルが切りつけたところだろう。

人の手当てよりも自分の腕を先にすればいいのに・・・。

そんなことに思いあたり、警戒していた心がふっと軽くなった。
あきらかに兵士ではない子どもに、罪はない。

『うん。
緊張していると効くものも効かなくなるからさ。
ここにあなたを害するものはないよ。
ゆっくり休んで』

気を緩めた瞬間、花の香りが鼻先をくすぐった。
鳥の声が聞こえ、森を抜けたさわやかな風が髪をなでる。

ここは天国か……。
いや、そうか、“天使の森”だったな……。

柔らかな陽光を頬にうけ、ラウルは再び意識を手放した――

ぱしゃん……

水音に、のどの渇きを覚えた。
眠っていたのか気絶していたのかさだかではないが、体を休めたおかげで頭はすっきりした。
ラウルは、剣を杖がわりに体を起こす。
自分の体をあらためて見ると、いたるところに布がまかれ、ぐるぐる巻きになっている。
縛り方は、どうも器用とはいえないようだ。
それでも、腹と背の矢傷は、そのままにしていたら確実に致命傷だった。

先ほどの子どもはどこにいったのか。

立ち上がろうと、ぐっと足に力を入れたら、布に血がにじんだ。

……まだ無理はいけない。
それでも喉の渇きをうるおしたくて、這うように水音のする方へ向かった。

ぱしゃん、ぱしゃ……

泉は、すぐ近くにあった。
さほど大きくはない泉の中央で、栗色のふわふわが動いている。

『おい』

そういえば名前を知らなかった。
とりあえず呼びかけてみる。

『……！』

水浴びをしていた人物は、びっくりしたように振り向いて、ばしゃばしゃと音を立てながら、慌ててラウルの方に寄ってきた。

『動いちゃだめ！』

焦っている理由は、ラウルを心配したものだった。
それとは別の理由で、ラウルも焦る。

『おまえ……女か……！』

『え……わ……あわわ……』

先ほど服と胸当てで隠れていた場所にはわずかなふくらみ。
ずいぶんとささやかだが、腰の細さといい、男とは違う。

『やだ……あっちむいて！
そこの服とって！！』

なんだか難しいことを要求された。
ラウルは、前者をきれいに無視して服を渡してやる。

『あっちむいてって言ってるのに！』

『あっちを向きながらどうやって服を渡すんだ』

当然のことを言われた子どもは、『うぅ』とうなりながらもさっと服を奪い取った。
そして濡れるのもかまわずに羽織る。

『心配しなくても、子どもに興味はない。
それより水をくれないか』

見たところ、１２、３歳といったところか。
すらりと伸びた手足が子鹿のようだ。
ラウルが泉で顔を洗っているうちに、子どもはどこからか水をたっぷり入れた水筒を持ってきた。

『奥の岩場から湧き出てるんだ。
この水を飲むと１０年寿命が延びるといわれてる』

傷もこの水で洗ったから、きっとすぐ元気になるよ、と無邪気に笑う。

『……痛っ』

子どもが、水筒を差し出そうとして急に顔をしかめた。
左腕を押さえる。

『さっき俺が切ったところか。すまなかった』

『ううん、大丈夫』

腰にぶら下げた鞄から乾燥させた薬草を取り出す。
泉の水に浸して軽くもんでから、袖をまくって傷口に塗りつけた。
右手と口を使って布を巻きつけようとするが、なかなかうまくいかない。
やはりこの子ども、かなり不器用である。

『貸せ。やってやる』

ラウルは、自分の傷も痛むが、なんとも見ていられなくて手をだした。
子どもと違い、手際よく布を巻いていく。

『ありがとう。上手いね』

素直に感心する声に、なんだか背中がむずむずした。

『おまえが下手すぎるんだ』

だからついそんな言葉が出た。
すると、ふわふわの子どもは、むっとすねたように唇をつきだし、
横を向いてしまった。
幼い動作が笑いを誘う。

『……くっ……はは、ははははは』

ラウルがたまらず声をあげて笑う。
腹の傷にひびくが、一端笑い出したら止まらなくなってしまった。
こんなに笑ったのはしばらくぶりだ。

『な、なんだよ。そんなに笑うことないだろ！
ちょっと……おいったら……！』

からかわれたのがわかったのか、子どもは真っ赤になって怒っている。
栗色のふわふわと相まって、毛長の子猫が一生懸命自己主張しているようでなんとも愛らしい。

『いや、すまない。……くっ。くく……。
おまえは命の恩人だ。
今は何の礼もできないが、落ち着いたらオーレリアの城に来てくれないか。
俺の名はラ・・・』

『ちょっとまって』

名乗ろうとしたのを、子どもは止めた。

『ごめん、気持ちはうれしいけど、私は傷ついたあなたをほっとけなくて手当てしただけ。
デナーシェの民なら誰でもこうするよ。
でも、名を聞いてしまったら、私はあなたの味方をしたことになってしまう。

それはとってもまずいんだ』

そうだ、とラウルははたと気づく。
ここは魔の森で、子どもはあのデナーシェの民だった。
戦争の間ずっと中立を貫き、どこの国にも敵対しないかわりに、どこの国の味方もしていない。
たとえ隣国の難民が助けを求めて城門をたたいても、すべて無視を貫いている。
ラウルの胸に、苦い思いが広がる。

あのとき門があいていたら。
せめて物資を塀の外にいる者にも分け与えてくれていたなら、おばぁは死なずにすんだかもしれない。

急に押し黙ったラウルを見つめ、子どもは心底困った顔をする。

こいつに憎しみをぶつけても、何も解決しない。

胸の内の激動を深呼吸で鎮め、かつて村の子どもにしたように、ラウルは子どもの頭をぽんぽんと手の平でたたいた。
思ったとおり、ふわふわの、なんとも言えない良い撫で心地だった。

『あやまらなくていい。
おまえの事情もあるのに勝手を言ったのは俺だ』

言いつつも頭を撫で続ける。

『ううん、ごめんね……って、いつまで撫で続けるのさ』

微苦笑の後の呆れ顔。

表情がくるくると変わる様もおもしろい。

『いやぁ、つい、気持ちがよくてな。
昔こんなさわり心地の猫を飼っていたことを思い出した』

それは幼いころの幸せな思い出。
もう何年も思い出さなかったのだが、急にあの頃のことを思い出した。

『わ、私は、猫でも猿でも、亀でもなーーーーーーい！！！』

今度はまた怒り出した。
猫とは言ったが、猿だの亀だのと言った覚えはラウルにはない。

……言われたことがあるのだろうか。
いや、あるんだな。
身近な誰かに猿呼ばわりされたに違いない。

こんなおもしろい生き物が側にいたら、毎日楽しいだろう。
この子の側にいるだろう家族や友人を思い、少し妬いた。
次は笑顔を見てみたいな。

『まぁもう少し育てば人間になれるさ』

子どもの胸当てをつるりと撫でた。
皮を鞣してあるとはいえ、あまりにも真っ平だ。

『&%▲○#$×〜〜〜〜〜〜〜〜〜！』

今度は言葉にさえならなかった。

ラウルはまたひとしきり大笑いをし、再びすねた子猫をなだめることになった。

ピューィィィィ

遠くで仲間の指笛が聞こえる。
ラウルがもう戻らねばと言うと、子どもはぷんぷん怒りながらも、水筒と、なんと馬を貸してくれた。

『この子はアルノー。
とても利口な子だよ。
この子がいれば、天使の森で迷うことはない。
森の出口で離してくれれば、勝手に私の元に戻ってくるから』

ほどよい筋肉がついた、小柄な脚の太い馬だった。
これなら深い森や、多少の岩場も大丈夫そうだった。

ラウルはデナーシェの子どもに礼を言い、くしゃりと頭を撫でた。
やはり良い撫で心地だ。

『無理しないでね』

そういって子どもは、ふわっと微笑んだ。
ふわふわの髪そのもののような、柔らかい笑みだった。

森を抜け、仲間と合流するかしないかといったところでまた敵襲があり、ラウルは借りた馬にまたがったまま戦うことになった。
決して速くはないが、この馬が利口だというのは本当で、怪我をしていた彼をうまく助けて走った。

ふわふわの子どもに手当てしてもらった傷は、城に戻るころにはすっかりよくなっていた。
致命傷とさえ思った腹と背の傷でさえ、ほとんどふさがっていた。
デナーシェの民の不思議の力は本当にあったのだ。
それとも『１０年寿命が延びる』と子どもが言っていた、あの湧き水のおかげか。

戦争が終わり、平和が訪れてからも、アルノーは城の厩舎にいる。
ラウルは、落ち着いたら魔の森……いや天使の森の近くで離してやろうと思っていたが、あの夢のようだった泉の一時を手の内に置いておきたいような気がして、手放せずにいる。

小高い丘から天使の森を見下ろし、思い出に浸っていると、後方から呼び声がした。

「ラウル様――！」

警備兵が、ようやく追い付いてきたようだ。

まさか俺がデナーシェの王女と結婚することになるとは思わなかったな。
さてどんな態度をとってやろうか。

あの森とは違う、暗い笑みが口の端に浮かぶ。
たった一人、好感を持てる民に会ったからといって、デナーシェに対する憎しみは消えない。
この苦しみを、いつか忘れられる日がくるのだろうか。

必死の形相でこちらに向かってくる兵士たちを振り返り、ラウルは一つ溜息をついてから、また「面倒くせぇな……」とつぶやいた。

5　国境での出会い

「リュシエンヌ様、もうすぐですわね」

王女と共に馬車に乗るユリアが、嬉しそうに言う。
国境のある街道を進んで三日目。
そろそろ腰が痛くなってきたところである。

前方に騎馬隊が見えた。馬車が止まる。
リゼットは、窓越しに会釈をしてきた自国の警備兵に手を振って、別れを告げた。
続いてオーレリアの警備隊長に挨拶をしようと外をうかがうと、馬から降りた警備兵たちが、王女たちの乗る馬車のほうではなく、しきりに斜め前方を気にしていることに気付いた。
整然と並ぶ兵たちの列が、前方から徐々に乱れていく。

「王！　おやめください！
　いくらなんでも失礼ですよっ」

どよめきの中、するどい声がとんだ。
何事かとユリアが窓から様子を見ようとした途端、乱暴に扉が開けられた。
とっさに王女をかばおうとした侍女は、難なく押しのけられ車内に尻餅をつくことになる。

「よぉ。おまえがデナーシェの王女か。
　俺がオーレリアの王、ラウル＝オーレリアだ」

力に満ちた声。

がっしりした肩。
強い光を秘めた瞳。
黒い軍服に身を包んだ男が、そこにいた。

「……！」

リゼットが慌てて口元を扇で隠すのと、王と名乗った男が後ろから引っ張られて別の男と入れ替わるのは、ほぼ同時だった。

「こんの、馬鹿野郎！　そんな挨拶がありますか！
リュシエンヌ王女、大変申し訳ありません！
私（わたくし）、オーレリアにて宰相を務めさせていただいております、ティエリーと申します」

「……初めまして。
デナーシェの第一王女、リュシエンヌです」

内心の驚きをひた隠し、リゼットは平静を装って入れ替わった男に名乗る。
浅葱色の長衣をまとった男は、長い髪を後ろで結わえ、丸眼鏡をかけていた。
この男（ひと）が宰相か。
若いな、とリゼットは思った。
そして、さっきの人。
あれはもしかして――。

「……ってください」

「え？」

「リュシエンヌ様、下がってください！」

「あっ」

振り返れば、鬼の形相のユリアがいた。
リゼットは、侍女の迫力に押され、馬車の中に追いやられる。
オーレリアの宰相もまた、馬車から一歩身を引き、跪いて礼をとった。
ユリアは馬車から彼を見下ろすと、歴戦の騎士も震えあがるのではという剣幕で怒鳴りつけた。

「ティエリー様、でしたっけ。これがオーレリアのやり方ですか？
このお方をどなたと心得ます！
大陸一の歴史ある大国、デナーシェの第一王女、リュシエンヌ様にあらせられますよ！
即刻デナーシェの警備隊を呼び戻してください。婚儀は白紙です！」

「侍女殿、お待ちください！」

「このような侮辱、たとえ王女様のご夫君になられる方であっても、許されることではありません！
国に戻り、国王陛下にご報告させていただきます！」

「ユリア、別に私は……」

リゼットは、ユリアを落ち着かせようと肩に手を添えると、跪く宰相の隣で、腕組みをして冷えた目線を向けるラウルに気付いた。

「お願い、ユリア、落ち着いて」

「リュシエンヌ様は黙っててください！」

「ユリア」

「じゃぁ、また戦争だな」

「！」

静かに言い放った王に、その場にいた面々が注目する。

「俺はいいぜ。
デナーシェに攻め込んで、平和ボケしたおまえのとこの兄貴の首をとるまでだ。
それでもいいか、侍女さんよ」

馬鹿、何を言ってるんだと地に膝をついた宰相は男の足をひっぱるが、そんなことは気にしないようだ。
ユリアは不遜な男の視線を正面から受け、指が白くなるほど拳を握って肩を震わせた。

「あなた様という方は……！」

「ユリア、もういいわ。代わってちょうだい」

「リュシエンヌ様っ」

リゼットはくやしさに涙をにじませる侍女を下がらせ自ら馬車を降りると、オーレリア国王の前でドレスの両端を持って深々と礼をした。

「申し訳ありません。
王自らおいでいただけるとは思いませんでしたので、突然のことに侍女が取り乱しました。
デナーシェの第一王女、リュシエンヌにございます。
陛下、そしてオーレリアの方々、お迎えありがとうございます」

顔をあげ、ゆったりと辺りを見回して微笑む。
最後に視線を男に合せて、再度礼をした。

間違いない。
彼は、あの時出会った男(ひと)だ。

男の言葉を待ちながらも、リゼットの胸に懐かしさが広がる。
数年前、森で狩りをしていたときに出会った、傷だらけの騎士。
もう一度会いたいと思っていた。
手負いの獣のようだった彼を、とにかく手当てをし、愛馬を貸して逃がしたが、そのあとどうなったかずっと気になっていた。
愛馬(アルノー)が戻らなかったことで、敵の手に堕ちて死んでしまったかと思っていた。
でももしかしたら、生き延びて彼のもとでアルノーが飼われていたらいいと、淡い期待をしていた。

その彼が、目の前にいる。
しかも、自分の結婚相手として。
リゼットはつい喜びをあらわにしそうになって、慌ててとどまった。
ここで、自分があのときの子どもだとわかってしまったら、姉の身代わりができなくなってしまうからだ。

「ふん。

この程度のことでは動じないか。さすがはお偉い王女様だ」

「……！」

喜びに震えていたリゼットの胸が、一瞬のうちに凍りついた。
言われた言葉よりも、その声音があまりにも冷たかった。

「礼儀もくそもない新興国なもんでな。
お上品な王女様には合わないこともあるだろうが、あきらめてくれ。
ティエリー、あとはまかせた。俺は執務に戻る」

男は黒いマントをひるがえすと、馬に飛び乗り駆けて行ってしまった。

「ちょっ……王！？」

残されたのは、婚礼用に優美に飾られた馬車とあっけにとられるオーレリア勢。
呆然とたたずむリゼットと、手巾で涙をぬぐうユリアだった。

「なんっ……なんなんですか、あの方はッ」

荷ほどきが終わり、二人きりになると、ユリアは地団駄を踏みながら叫んだ。
国境からオーレエリア城までは、馬車でも一日の距離だった。

王妃のために用意されたという部屋は、上質の調度品で埋め尽くされ、細やかな心配りのできる使用人がついていた。
今日からここで”リュシエンヌ”は暮らしていく。
国境で出会った王の態度から、自分は歓迎されていないのかと思ったリゼットだったが、それは違った。
ティエリーはじめ、オーレリアの人々は温かく迎えてくれて、身一つで来ても何の不自由もなかった。

「私、何か嫌われるような態度でもとったのかな」

「そんなことありませんよ！　リュシエンヌ様は立派でした！
あいつが失礼なんですよ」

「あいつって、あのね……。
まぁ、いいよ、嫌われてるなら顔を合わせることも少ないでしょ。
ここの生活に慣れるまでは、私もどんなボロを出すかわからないから、都合がいい」

「そうですわねぇ。もしかしたら、次にお会いするのはお式のときかもしれませんわね」

ユリアは、冗談で言ったつもりだった。
しかし、王は本当に一度たりとも王女の部屋を訪れることはなかった。

結婚式当日。

衣装合わせをしたり、式の作法を教わったりしているうちに、あっという間にその日が来た。

「お腰を締めますので、そちらの柱につかまってらしてください」

「はい」

ユリアと部屋付きの侍女の手により、婚礼衣装を身に付ける。
デナーシェのドレスはゆったりした古風な意匠（デザイン）なのだが、ここ、オーレリアは違う。
肩を出して胸を強調し、腰はコルセットで細く締め、スカートを大きく膨らませるための腰当（クリノリン）をつける。

「こちらの腕輪はどういたしますか」

侍女が手の平で指示したのは、左腕につけた守護（アミュレット）の腕輪。
金細工に宝石がちりばめられており、デナーシェの古い文字で心身の健康と大いなる幸福を願う言葉が刻まれている。

「これは大事なものだから、つけたままでもいいかしら」

「はい。見事なお品で、王妃様のお美しさを引き立てると思います。ベールに引っかかるということもなさそうですし、大丈夫です」

「ありがとう」

王女は、侍女の一人一人にもきちんと礼を言う。
使用人だからといって、ぞんざいに扱うことはない。
生まれは違えど、彼らも一個の人間であり、職務を全うしようと努力する姿に敬意を払うべきだと思うからだ。

また、そう言った態度を姉ならとるだろうと考えるからでもある。
誇りを持って、勤めを果たす。
たとえ、どんなに相手がこちらに背を向けようとも――
結婚式が行われた神殿は、オーレリア城の敷地内にあった。
国境での出会い以来顔を合わせていなかった男は、はじめにちらりと視線を寄越しただけで、その後は妻となった彼女を見ることはなかった。
リゼットも、式の段取りを間違えないようにするので精一杯だったし、披露宴では各国の使者からの祝辞を受けるのに忙しくて、夫の顔を正面から見ることはなかった。

そして、結婚式の夜。
リゼットは、ごてごてとした飾りのついた夜着を着せられて、自室で控えていた。
月はとうに中天にあがり、もはや今夜の王の来訪はないものかと思ったそのとき。
蝋燭の火がほのかに揺れ、扉が開いた。
「陛下……。お待ちしておりました」
リゼットは寝台から立ち上がり、男を迎える。
結婚式でも変わらなかった真っ黒な衣装は、闇に溶けて彼を恐ろしいもののように感じさせた。
男が近付いて来る。

強い酒の匂いが鼻をついた。
「大分……召されたようですわね」
「あぁ。こんなこと、正気でできるか」
「……」
男がリゼットの肩を押し、寝台に横たえる。
裾を割って、男の手が太ももをなぞった。
リゼットはぞくりと震える体を押さえるように、きつくシーツをつかむ。
「おまえ、恋人がいたんだろ。マルスとかいう」
「！」
「そいつとはやったのか」
「あ、な、何、をでございましょうか、陛下」
「何をじゃねぇよ。
まさか腹にそいつの子どもなんかいないだろうな」
「私は……違います」
「何が違うっていうんだ。まぁ、してみればわかることだがな。
おまえはどうして嫁に来た？
兄貴に言われたのか？」

「いえ、私の意志でまいりましたわ」

「ふっ……。そうか。
国のために恋人を捨てて？
感心するよ。生粋の王族ってのは偉いね。
遊ばれて捨てられた男は今頃どうしてるんだ。
おまえたちには、人の情というものがないのか？」

リゼットの体をまさぐりながら言葉を紡ぐ男の表情は、どこまでも暗い。
何が彼を変えてしまったのか、とリゼットは戸惑う。
あの森で会ったときには、こんな顔をする人ではなかったと思うのに。
明るい声で笑う、夏の日差しのような人だと思ったのに。

私の、せいなのだろうか――

リゼットが自分の物思いに沈みこんで言葉を返さなかったのをどうとったのか、男はそれ以上問いかけてくることはなく、事務的にことを進めた。
ユリアが用意した香油は、多少滑りをよくはしてくれたが、痛みを完全に取り除いてくれるものではなかった。

破瓜の血が、股を伝う。

「初めてか。デナーシェの王も酷なことをする」

涙に頬を濡らしながら、リゼットが見たのは悲しげな青い瞳。
軽蔑以外の色を初めて浮かべた男は、しかしリゼットを温めてくれることはなく、身辺の始末をすると、すぐに扉の外へと消えて行っ

た。

「う……ふっ……く……」

扉が閉まった途端、一時は堪(こら)えていたものが、一気にあふれてきた。
枕に顔を伏せて声を殺し、リゼットは引き裂かれた痛みに耐える。

なぜこんな扱いを受けるのか。
政略結婚とはいえ、妻として迎えられたなら、それなりの愛情は持ってもらえると思っていた。
姉だったら違ったのか。
美しい姉。
愛する人を見つけた姉。
身代わりを申し出たのは、姉の役に立ちたかったからだが、もしかすると、自分も姉のように愛し愛される人を得られるかもしれないという思いがあったのかもしれない。

騙そうなんて、思ったのが悪かったの――？

答えをくれる者などいるはずもなく、空が白み始めるまでリゼットの嗚咽は続いた。

5　国境での出会い（後書き）

「ムーン版」に分岐があります。

6　闇

王妃を迎えての朝は、有能な宰相の小言で始まった。

「あなたねぇ、何を考えてるんですか」

「東の穀倉地帯の灌水工事の予算と人足の調達について。
それから各国に送る賠償金の明細書の様式、孤児院の子どもたちによる慰安訪問計画の立案……」

羽根ペンを片手に、ラウルが目の前の書類をめくっていく。

「違うでしょう！」

ばん！　っとティエリーが執務机を叩いた。
あまりの勢いに、ラウルが手にしていたもの以外の書類が宙に舞う。

「昨日は結婚式だったんですよ？
ってことは昨夜は初夜でしょう？
今朝はゆっくり王妃をねぎらって、共に朝食をとるくらいしたらいいじゃないですか。
なのになんでこんな時間から仕事をしてるんです」

「なんだよ。いつもは早く仕事しろってうるさいくせに」

「いつもはいつも！　今日は今日！
まさか飲みすぎて手を出してないなんてことないでしょうね」

「やるこたやってるよ。
心配なら侍女頭にでも確認してこい」

「う、あ、そうですか。
ならいいんですけどね。でもそれならなおさら」

「おまえらみたいに相愛で夫婦になったならともかく、昨日まで碌に顔も合わせなかった女とぐだぐだ寝てらんねぇよ」

「ラウル……。あなた、やっぱりこんな器用なことできなかったんじゃないですか」

途端に心配顔になった幼馴染に、ラウルは苦笑を返す。

「そんなことねぇよ」

「和平のための婚姻なんて、そりゃ、大陸の平和は私たちの願いでしたけれど、そのためにあなただけが犠牲になることはなかった」

「大陸の平和、ね」

「ラウル？」

よっと掛け声をかけて、男は立ち上がる。
ティエリーが落とした書類を拾いながら、執務室の中をゆっくりと歩いた。

昨夜――
王としての務めと個人的な復讐のために、彼女を抱いた。

あの王女に罪はない。それはわかっている。
当時自分たちを締めだしたのは、彼女の父である前デナーシェ王だ。
それでも、自分が苦しんでいるとき家族に囲まれて幸せに暮らしていたかと思うと憎しみが湧いた。
国境で奇襲をかけたにもかかわらず、扇片手にこの上なく優雅にそつなく口上を述べる姿を見て、縊(くび)り殺したい衝動に駆られた。
自分を抑えられる自信がなくて、式まで会わずにいた。

式が済んだら彼女を凌辱し、和平を盾にじわじわと苦しめてやる。
それが復讐になると思った。
ところが。
城に入った王女は、侍女や使用人からの評判がすこぶるよかった。
大国の王女だと言って威張ったり見下したりこともなく、誰にでも丁寧に接していた。
進んでオーレリアのことを知ろうとし、式の段取りを覚えようと一生懸命だったと言う。

殺したい。
殺せない。
憎みたい。
憎み切れない。

自分の気持ちが図れず、初夜だとわかっていても、酒の力を借りないと部屋に行く事すらできなかった。
月明りに浮かぶしみひとつない肌は、柔らかくて花の香りがした。
ことが済み、後ろ手で閉めた扉の向こうからは、押し殺した泣き声が聞こえてきた。

閨事の最中に痛みから流された涙とは明らかに違う、せつない声。
復讐を果たしてすっきりするどころか、何とも言えない苦い思いが胸の内に広がった。
これは一体なんなんだ。
確かに、固い蕾を押し開かれ、痛みに耐える姿は、男の暗い欲求を満たした。
しかし続く嗚咽にいたたまれなくなって、かといって自室で眠る気にもなれずに執務室に来た。
式のためにティエリーが仕事量を調整していてくれたから、たいした書類はなかった。
それでも、文字を追っているだけで気がまぎれた。
そして今に至る。

「心配しなくても離縁なんかできねぇし、表面上だけでも仲よさそうにしとけば対面は保てる。
あれも利口な女のようだから、下手な騒ぎは起こさねぇよ」

「そういうことじゃないんです。
私は、あなたにも幸せになってほしいんです。
今は亡きおばあさんだって、それを望んでいますよ」

「おばぁも、か」

書類を拾い終わったラウルは、机の上で端をそろえてから椅子に座る。

「あとで花でも送っておくさ。それでいいだろ。
そのうちしっくりくるようになるさ」

「そ……うですか。
では庭師に適当なものを見繕うように言っておきましょう。
ここに届けさせますから、文(カード)を付けて侍女に渡してくださいね」

「わかったよ。ありがとさん」

先ほど途中まで見ていた書類に、羽根ペンにインクをつけてサインをする。
仕事を再開した友に気遣う視線を残して、ティエリーは部屋を後にした。

7　城下町（前書き）

地の文を一部”リゼット”に直しました。

7　城下町

初めての夜のあと、遠慮がちにリゼットの寝室を訪れたユリアは、泣きはらした目をした主に驚いた。
わけを聞いてもリゼットは答えず、とりあえず他の侍女たちに会う前にと慌てて目元を冷やした。
ユリアより少し遅れて入室してきた部屋付きの侍女たちは、顔を伏せる王妃の動作を恥ずかしさからだと認識し、汚れた寝具を見て喜んだ。
王の姿こそなかったが、すぐに届いた薔薇の花束に、これでようやく本当に戦争が終わったと胸を撫でおろしたという。

オーレリアがデナーシェの王女を迎えてから半年。
王妃となったリゼットの私室には、今日も大輪の薔薇が届いた。
添えられた文（カード）には、ラウル＝オーレリア、とそっけなくサインだけがしてある。
閨（ねや）を共にした翌日だけに届くこの花束は、これで六つ目となった。

「これでまた当分お越しはありませんね」

花を花瓶に生けながら、ユリアがさばさばとした口調で言う。

「そうね」

答える王妃の目にも、初めのような涙はなかった。
ラウル＝オーレリアという男は、その粗暴なふるまいとは違い、王

としての責務はきちんと果たす律儀な男だった。
平素はほとんど顔を見ることはないが、公式の場においては、何かにつけて大国出の王妃を立て、嫁いできたことへの感謝といかにリゼットが王妃として素晴らしいかを述べた。
客人を案内して共に庭園を歩いたときには、腰に手をまわして耳元に唇を寄せて会話し、仲睦まじい様子を周囲に見せた。
けれども人目がなくなった途端、その顔からは笑みが消え、指先どころか視線のひとかけらすら絡み合うことはなかった。
そしてこの月一回の訪問。

初めの頃、リゼットはあのおそろしい夜がいつまた来るのかと、毎日びくびくしていた。
体よりも心が傷つけられた出来事を、なかなか忘れることはできなかった。
落ち着かない夜を幾日も過ごし、なんだ、一度だけだったのか。もう来ないのだな、と思った矢先に男は来た。
そして翌日届いた薔薇の花。
それを二度ほど繰り返し、男が王妃の部屋を訪れるのは月のものが来てから約十日後であることに気付いた。

あぁ、これは種付けだな。
王妃はそう理解した。
狩りと乗馬を趣味とするリゼットは、馬屋番に無理を言って、馬の交配を手伝ったことがある。
毛並みの良い馬、足の速い馬、腰の強い馬などいろいろいるが、欲しい馬の種類に応じて親馬を掛け合わせた。

結婚の次は子作りか。

もちろんそれも王族の務めだ。

ラウルがそういう姿勢でいようというのなら自分も合わせようと、リゼットは人前ではできるだけしとやかに過ごした。
出すぎず控えめに、常に夫を気遣い、微笑みを絶やさないようにした。
行動に困ったときは、姉の言動を思い出してまねをするか、じっと黙っていた。
庭園で腰を引き寄せられたときには、わずかに頬を染めてみせさえした。
そんなリュシエンヌに、時折男の瞳が何か言いたそうに揺れることがあったが、王妃がそれに気付くことはなかった。

「んじゃ、出かけてくる」

「え、リュシエンヌ様。お体は大丈夫ですか」

「うん、平気。あとよろしくね」

リゼットは、部屋に自分とユリアしかいないのを確かめると、かぽっと鬘（かつら）をはずした。
オーレリアに来た当初は染めていた髪だったが、突然来る客人などいないし、夫が触れてくることもないことから鬘に変えてしまった。
化粧を落として服も着替える。
ごてごてとしたドレスから、丈夫なだけが取り柄の簡素な布でできたチュニックへ。
言うことをきかない猫っ毛は1つに束ねて、寝台の下に隠しておいた矢筒を背負った。

「夕方には戻るから」

窓の桟に手をかけると、ひょいと手近な枝に飛び移った。

残されたユリアは、クッションを丸めて寝台につっこみ、枕に鬘を乗せてそれらしく見せると、「いってらっしゃいませ、リゼット様」と口の中で小さくつぶやいた。

「やぁ、リズ！　久しぶりじゃないかい。
　いい林檎が入ってるよ。それ！」

リゼットが城下町を歩いていると、すっかり顔なじみになった店屋のおかみが真っ赤に熟れた林檎を投げてきた。

「ありがとう、おかみさん！
　これ、今日の分。よろしくね」

「相変わらずいい物持ってくるじゃないか。
　どぉれ、こんなもんでどうだい」

おかみの手の平には、毛皮の代金としては妥当な金額の銅貨。
リゼットは、大きくうなずいてそれを受け取ると、満足顔で露店を冷かしに出た。
もらった林檎をかじりながら、ユリアにお土産でも買っていこうかと店先をのぞく。
食べ物、日用雑貨、工芸品、服――
オーレリアの城下町には、豊富に物があふれ、活気のある声が飛び交っていた。
市井の人々が元気なのは、いい政治が行われている証拠だ。

リゼットがこうして街に顔を出すようになってから、すでに二か月あまりが経つ。
元々活発な性質(たち)のリゼットは、城での生活に慣れるに従って体を動かしたくなった。
ひとまず、ユリアの侍女服を借りて城の裏庭を歩いてみた。
ばれる気配は全くなかった。
それもそのはず、公式行事さえなければ夫に昼間会うことはなかったし、他の者もつつましやかで気遣いにあふれる王妃がまさか城を抜け出しているとは思わなかった。

リゼットが出かける時間は徐々に伸び、ある日とうとう森に入った。
緑の中を自由に歩き回り、誰に見られることもなく気持ちの良い空気を胸いっぱいに吸う。
小鳥のさえずりを聞きながら、やわらかな草に寝転がって空を見上げる。
自分(リゼット)に戻れる瞬間が、森にはあった。
その日以来、リゼットは城の者の隙をついては森にでかけるようになった。
当然のように狩りを始め、ちょこちょこと仕留めた獲物の毛皮や干し肉がたまってきてしまった。
はて、捨てるのは惜しいが誰かにあげることもできない。
けれども街に行って売るのも勇気がいる。
街にほど近い森の小道でどうしようかと考えていると、一台のほろ付き馬車に出会った。

『やぁ、あんた。女の子が、こんなところでどうしたんだい』

血色のいい、小太りの女性がひょいと顔をのぞかせた。

面倒見のよさそうなその笑顔に、何の気なしに獲物の処理に困っていることを話した。

『あぁ、あんたも地方の村から出てきたくちかい。
オーレリアの王はうちらがこうやって店を出すのを奨励しててね。
他の国に比べたら簡単に店を持つことができるのさ。
まぁ初めは誰かの紹介が必要だけどね』

地方の村から王都の活気をきいて、店を開こうと一家で移ってきたという。
知人がいるので紹介状もあるから、この馬車の荷台を店にするそうだ。
なんともたくましい。
店屋のおかみはリゼットが持っていた毛皮と干し肉を手に取り、品定めを始めた。

『うん、あんた、いい腕してるね。
これなら十分に売り物になるよ。
よかったらうちの店で扱ってあげるよ』

『本当！？　やったぁ、おかみさん、ありがとう！』

こうして王妃は、趣味が高じて小遣いかせぎができるようになった。

「これとこれとこれ……あっと、こっちもちょうだい」

「毎度あり！」

ばら売りの焼き菓子を見つけ、今日のお土産はこれ、と決めた。
リゼットがそろそろ城に帰ろうと荷物を小脇にかかえて歩いていると、一人の男性に声を掛けられた。
店屋のおかみのご主人だ。

「リズ。用がなかったらちょっと手伝ってくれないかい」

男が引いていたのは大きな台車。
城に納品する品物が、山と積まれている。

「帰りにいつものところ通る？」

「あぁ、もちろん」

主人が台車を引っ張り、リゼットが後ろから押す。
二人がかりで運ばれた荷物は無事納品され、出口用の通用門へと向かった。

「じゃぁまたな。助かったよ」

「うん、またね！」

門の手前で、リゼットは店屋の主人と別れる。
リゼットが向かう先には、城の厩舎があった。
以前、同じように荷運びの手伝いを頼まれたときに見つけたのだ。
そのときは、一緒に行くはずだった主人がけがをして動けないと、店屋のおかみに泣きつかれて手伝った。
はっきり言ってこの姿で城には近づきたくなかったが、恩のあるおかみの頼みだ、そうそう断れなかった。
しかし、そこで出会ったのだ。

「アルノー！　会いに来たよ！」

「ブルルルル！」

リゼットが声をかけると、たくさんの馬の中でひときわ脚の太い馬が蹄を鳴らしていなないた。

「元気そうだね。よかった」

数年前ラウルに貸して、とうとう帰ってこなかったリゼットの愛馬。もう八割方死んだと思っていた。

城の厩舎で会えるなんて思わなかった。

商人の通用口近くにあるこの厩舎は、時おりオーレリアの民も子どもに馬を見せに来ている場所だ。

馬屋番もいたが、害のなさそうなリゼットが一頭の馬を一撫でしたとて、気にする様子はなかった。

店屋の主人もただの馬好きと思っている。

だから今日も、リゼットは故郷を懐かしみながら愛馬と一時の逢瀬を楽しんでいた。

本当なら毎日でも会いたい。

でも頻繁に通うと不審がられるかもしれないから、おかみか主人に頼まれたときだけと自分なりに決めていた。

リゼットが近づいていくと、アルノーがいたずらっ気を起こして、栗色の髪をはむっと噛んだ。

「あ、こら、やめろ」

「ブルルルル」

遊ぼうよ、とでも言うようにじゃれてくるアルノーに、リゼットは鼻筋を撫で、首をぽんぽんと叩く。
こうして撫でるだけじゃなく、この背に乗って好きなだけ駆けられたらいいのに。
そんなことをぼんやりと考えていたから、厩舎の入口に黒い人影が落ちたのに気付かなかった。
馬屋番が礼をとり、アルノーの耳がぴくりと反応する。
ブルッと鼻先でつつかれて、リゼットはようやく入口に目を向けた。
リゼットの姿を見止めたその影は、驚いた様子で息を飲んだ。

「おまえ……ふわふわ？」

8　突然の再会

王妃の元へ行く日は、侍医に相談して決めている。
月一回。
それ以上通うつもりはなかった。

今日も執務室でむなしい朝を迎えた。
机の上に山になった書類は、一向に減る気配がない。
うんざりした男は、急ぎの報告書だけに目を通し、気晴らしに散歩にでかけた。
ティエリーは少しでも時間があれば王妃をお茶に誘えとうるさいが、数時間前に行ったばかりだし、貴重な休憩を重苦しい空気でつぶす気にはなれない。
公式の場では王と王妃として過ごしたが、それ以外は努めていないものと思うことにしていた。

「王様ってのも、面倒なもんだね……」

城の者たちが働く姿を眺めながら、ぶらぶらと歩く。

昔はもっと自由だった。
毎日の食事にも事欠く日々だったが、仲間がいて、家族がいた。
このまま王妃の元に通えば、そのうち子どもができるだろう。
俺は、その子を愛せるのだろうか。
憎まずに、いられるのだろうか……。

目的もなく歩いていたラウルだったが、馬の手入れでもしてやろう

と思いついて厩舎に向かうことにした。
すると、ラウルが覗いたのとは反対側の戸口のほうに、見慣れない人影があった。
特に珍しくもない、一般的な衣服（チュニック）。
皮のベルトで留められた細い腰。
ふわりと揺れる、栗色の髪。
男にとって特別な馬に、親しげに話しかけるあれは。

「おまえ……ふわふわ？」

はじかれたように振り向いた顔は、女性らしい丸みをおび、男物を着ていてももはや性別を間違えることはなかった。

「うちの国（オーレリア）に来ていたのか。
あの時は本当に助かった……おい！？」

懐かしさに近づこうとしたが、ふわふわの子ども、いや少女はびくっと肩を震わせたかと思うと、身をひるがえして厩舎を飛び出してしまった。

「ちょっと待て！　おい！！」

慌てて追いかける。
少女は迷いなく厩舎から通用門に向かう道を進み、納品を終えた商人たちの列をかきわけ、あっという間に姿が見えなくなってしまった。

「王だ！」
「ラウル様！」
「ラウル様！」

ラウルはといえば、民に好かれるというのはいいことなのだが、こちらもあっという間に人々と彼を守ろうとする兵に囲まれて、まったく身動きがとれなくなってしまった。

「いや、ちょっと待て、おい！
そこの！　止まれ！！」

名前を聞かなかったことをこれほど悔いたことはない。
自分を取り囲むのが兵や民では、張り倒して追いかけるわけにもいかない。
ラウルは、ふわふわの少女が消えた方向にただ声を張り上げるしかできなかった。

「あなたね、私がさんざん休憩する暇があったら王妃に会えというのを無視しておいて、城下で何やらかしてんですか」

「好きでやらかしたわけじゃねぇよ」

「黙りなさい！」

「だいたいあなたはね……」

執務室に戻り、ティエリーの小言を右から左に聞き流して、ラウルは消えた少女のことを考えていた。
いつオーレリアに来たのだろうか。
デナーシェの民が自国から出るのは珍しい。
王妃との婚姻から、少しずつ両国の交流が始まっているから、来た

とすれば最近か。
オーレリアの民の中には、デナーシェに恨みを持つものも少なからずいる。
嫌な思いをしていないといいが。

「ラーウル！　聞いてんのか、てめぇ！」

自分の王妃に対する態度は棚に上げて少女を心配していたラウルの耳を、ティエリーがひっぱった。

「痛ってぇな。
わかったよ、ちょいと王妃の顔でも見てくるよ」

本性を見せて怒鳴るティエリーを置いて、ラウルは王妃のいる東の宮へつながる渡り廊下を歩く。
途中会った侍女にこれから王妃の部屋を訪ねる旨を伝えると、めったにない昼間の訪問に慌てふためいて、急に周囲がばたばたし始めた。

「ラウル様、リュシエンヌ様はご準備にもうしばらく時間がかかります。
たいへん申し訳ありませんが、しばしお待ちください」

王妃の部屋の前に着くと、デナーシェからついてきた侍女――ユリアとかいう――が扉の前で頭を下げて待っていた。

そういえば、日中の王妃は何をしているのだろう。
自分の思いにばかり囚われて、妻とした女性のことを何も知らないことに気付く。
何を好んで何を厭うのか。

夜の寝室と公の場でしか会ったことのない彼女は、常に受け身で誰に対してもやわらかな態度で接し、己を出すようなことはなかった。だから、王妃の個人的嗜好など、ラウルが知る機会はなかった。いや、知ろうとすらしなかった。
王妃のことを考えると辛い過去ばかりが思い出されるので、あえて考えないようにしていたのもある。
彼女はこの半年、何を思い、何をして過ごしてきたのだろうか。

王妃の私室の簡易な応接室で待っていると、さほど経たずに彼女が現れた。

「お待たせして申し訳ありません、ラウル様」

背筋を正し、扇で口元を隠してしずしずと歩み寄る妻を、ラウルは改めて見やる。
複雑な形に結い上げられた黒い髪。
顔の横に一房だけ降ろして、肩から前に垂らしている。
濃い化粧に彩られた榛色の瞳は、確かデナーシェの若き王も同じ色だった。
リュシエンヌ。デナーシェの第一王女。
年は二十二だったか。
濃い化粧は好きではない。化粧を落とせばもう少し若くみえそうだが……。

「あの……ラウル様……？
　ご用件はなんですの？」

ラウルに無遠慮に見つめられ、居心地悪そうに王妃は言う。
口元を扇で隠しているため、くぐもったような声だ。

そういえば、あの子どもの瞳も茶色っぽくはなかったかと、ふとラウルは思い出す。

今日みかけた、あのふわふわ……。
俺の顔をみて一目散に逃げ出した。
人違いだったのだろうか。
いや、そんなことはない。

なぜだろう。

礼を言おうと思っただけだった。
以前、最後に見た微笑み。
もう一度見たいと思った。
そう、俺は会いたかったんだ、あいつに……。

「用がなければ来てはいかんのか」

「いえ……そんなことはありません」

ラウルのぶっきらぼうなもの言いに、王妃の顔がこわばる。
いつまでも立っていられても落ち着かないので、ラウルが彼女に座るよう促したところに、侍女がお茶を運んできた。
一口飲んで、自分がいつも飲んでいるお茶と同じ味だな、と当たり前のことを思う。

「……デナーシェの民は、皆お前のような髪をしているのか。
　そうでない者のほうが多いのか」

とりあえず何か話を、と思ったラウルは、目に留まったことを話題にした。

リュシエンヌはまっすぐな黒髪。
あの少女はふわふわとした栗色の髪をしていた。
お茶のカップを手に取ろうとしていた王妃は、珍しくがちゃりと音を立てて取り落とし、少量こぼれたお茶を慌てて手巾で拭いた。
気付いた侍女が、火傷の有無を確かめてお茶を淹れなおす。
改めて自分の前に置かれたカップをつかむ指は細く白く、よく手入れされた爪は桜色をしていた。

「髪は、私のようにまっすぐなほうが珍しいですわ。
兄は深いこげ茶色で、くせっ毛です。
妹は……」

「ラウル様、お茶のおかわりはいかがですか」

王妃の周囲を片づけ終わった侍女が、ラウルにお茶を勧めてきた。
カップの中には、まだ半分ほど残っている。
さして喉が渇いていたわけでもないし、そう長居をするつもりもなかった。
おかわりを辞し、別にラウルからわざわざ告げる必要のない今後の行事予定などを話して、席を立った。

「邪魔をした」

見送る王妃に背を向けて、扉を閉める。
会話ははずまなかったが、不思議とラウルの心は凪いでいた。
あんなにも憎くて仕方がなかったデナーシェの王族を前に、公用ではなく素の自分で冷静に話ができた。
口調がともなわないのは、まだ仕方のないところだろう。
あの少女のおかげか？

昼間の突然の出会いが、自分の心に何らかの影響を及ぼしている気がする。
女性らしく成長していたふわふわの面影が胸をよぎる。
また会いたい。そう思いながら、ラウルは仕事を再開すべく執務室へと戻った。

9　葛藤

国王を見送った王妃と侍女は、手を取り合ってその場にへなへなと座り込んだ。

「驚いた。ほんっとうに驚いたね」

「ううう、リュシエンヌ様。もうこんなのは御免です。
当分おとなしくしていてくださいね。
それから、余計なことはしゃべっちゃだめですよ」

「わかった。ごめん……」

厩舎でラウルに出会ったリゼットは、とにもかくにも慌てて逃げ出した。
自分を呼ぶ声を背に受けながら、人ごみで巻いて、すぐに部屋に戻った。
それが良かった。
窓から室内に戻ると、真っ青な顔をしたユリアがもうすぐラウルが来ると告げたのだ。
大急ぎで着替えて化粧をし、鬘をかぶった。
髪の話をされたときには、何か見抜かれたかと焦った。

「でもラウル様、何しに来たんだろうね」

「そうですねぇ」

あの、人当たりはいいが嘘くさい笑みを浮かべる宰相にでも言われて来たのかもしれない、とリゼットは思う。
そうでなければ、昨夜も来て花も届いたのに、またお茶を飲みになんて来るだろうか。
ラウルに比べ、ティエリーはユリアを通して何かとリゼットを気遣う様子を見せる。
しかし、手放しに信用されているわけでもなさそうだ。
城を抜け出すようになる前、日中あまりにも手持無沙汰で、この国のことを知りたいから専門の教師をつけてくれてないかと頼んだことがある。
ふさわしい人材を探します、と言われて数か月たつ。

「あ、花束のお礼を言うのを忘れた」

「お手紙でも書かれますか？
ラウル様はいつもお名前のカードしか添えてませんでしたから、礼状までは出していませんでしたけど」

「そうだね。……ふぅ、書くか」

ユリア経由で、部屋付きの侍女に透かし入りのきれいな便箋を用意してもらう。
昨夜のように夜のお勤めのある日はいろいろな侍女がやってきて用意をしてくれるが、それ以外はユリア一人でリゼットの身の回りの世話をしている。
かといって全くオーレリアの侍女を寄せ付けないわけにもいかず、必要最小限の侍女は隣室に控えさせていた。
心根の良い侍女たちは、王妃に用事を言いつけられるのを楽しみにしており、しかもそれが王への手紙と知って大いに喜んだ。
いくら対外的には仲睦まじく見せていても、来訪の回数で侍女には

主たちの関係はうすうす感じるものがある。
どうもまだあまりしっくりとはいっていないようだと思っていたところに、昨夜に引き続き昼間の訪問、そして王妃からの手紙と知って、侍女たちはいろめきたった。

「便箋一枚に、大騒ぎになっていましたわ」

「なんか、悪いことしちゃったかな」

「楽しそうにしてましたから、いいんじゃありませんか。
不仲説でも流されたら、リシャール様にご心配をおかけしますもの」

「そうだね」

ユリアから受け取った便箋に、リゼットは出来る限り丁寧に文字を綴っていく。
時候の挨拶、花束のお礼、お茶を一緒にできて嬉しかったこと……。

「嬉しかった、かな？」

嬉しいというより驚いた。
彼が来たことにまず驚いたし、口調こそ乱暴だったが目を見て話してくれたことに驚いた。
動揺していたせいかもしれないが、時おり彼から向けられていた、胸を突き刺すような憎しみも感じなかった。

「嬉しくなくてもそう書くものでございます」

「そっか。次はもっとごゆっくり、とか書いたら嫌味になる？」

「どうでしょうねぇ。ゆっくりされても困りますけど」
「ふふ、そうだね。じゃぁ、嬉しかった、だけにする。
よし、できた。これお願いね」
「はい」
インクを乾かして封筒に入れたものを、ユリアに預ける。
ユリアは部屋付きの侍女を呼んで渡し、侍女はそれを恭しく受け取ると、天鵞絨（ビロード）のクッションに乗せて運んで行った。
「あーぁ。
しばらく出かけられないとなると、またあの退屈な日々だね」
「刺繍の練習、なさったらどうです？」
「う……」
「リュシエンヌ様のご趣味は読書と裁縫。
読書は読んでるふりでごまかせますけど、お裁縫ばかりはものが残らないとだめですよ」
「ユリアが作ってくれればいいよ」
「そんなことおっしゃるからいつまでも上手くならないんです。
はい、針と糸どうぞ」
「あぁ、もう……」

その日から、王と王妃の関係は少し変わった。
夜の営みが月一回であることに変わりはなかったが、それまで別々だった食事を共にとるようになったり、ごくたまにではあるが手紙のやりとりがされるようになったりした。

「少し安心しましたよ」

王妃への返事をしたためて小者に渡すラウルを見ながら、ティエリーは口の端を上げる。

「王妃は美しい文字を書きますね」

「そうだな」

無造作に置いてあった手紙には、昨日読み終えたという本の感想が書かれていた。
ラウルは手紙を引き出しにしまい、親友の頭を通り越して壁に掛けられた剣を見やる。

「おまえは憎くはないのか」

「え？」

「デナーシェに、恨みはないのか」

「ラウル……」

ティエリーも母を幼い頃に亡くし、鍛冶師の父親も生死は不明だ。
「俺は、だめだ。
必死に生きて、国を作って、俺たち(みんな)が安心して暮らせる場所を見つけた。
俺たちを捨てた領主に仕返しをして、同じようなムカつく貴族も蹴散らした。
狼藉を働くような輩はこの国には入れないようにしたし、がんばるやつはどんどん取り立てた。
でもまだ夢を見るんだ。
あの、村が焼かれた夜の夢を。
そして、デナーシェの高い城壁の前で息を引き取ったおばぁの夢を」
「……」
「俺の復讐はまだ続いてる。
おまえには言わなかったが、和平のためなんていって、俺は王妃(あいつ)を娶って苦しめてやろうと思ってたんだ」
「わかってましたよ」
「何？」
椅子に深く腰掛け、苦しそうに眉を寄せるラウルをじっと見つめ、ティエリーは深い溜息をついた。
「だから、あなたにそんな器用なことはできないって言ったんです。
一体何年つきあってると思ってるんです？

デナーシェの王女を側において、相手が逃げられないのをいいことにねちねちとやろうとしたんでしょ？
それで、すっきりしましたか？」

「いや……」

「でしょうねぇ。
それ、私ならできますけどね、情の深いあなたには無理ですよ。
大方、憎みたい気持ちはあれど、彼女自身に罪はないことに考えが至って、苦しんでるんじゃないですか」

人生のほとんどを共に過ごしてきた幼馴染に胸の内を言い当てられたラウルは、ぐうの音も出ない。

「私、知ってるんですよ。
毎月王妃の元を訪れた後、彼女が眠るまで扉の外にいるでしょう。
初日こそ逃げるように執務室に来たらしいですが、それ以降は王妃が泣いていないか確かめてから仕事に戻ってる」

「侍女頭か」

「情報源はいろいろですよ。
ただ、情報をくれる者に共通しているのは、あなたを心配しているということです。
夜、うなされているようですね。
過去の夢を見ることによって、自分で憎しみを忘れないようにしているんじゃないですか」

「そうなの、かな」

ラウルの視線が、また古い剣へと移る。
それに気付いたティエリーは、壁から剣をとると無造作に腰に穿いた。

「私の打った剣があなたを縛る楔になっているというのなら、しばらくこれは預かります。
強い感情がこの国を作る原動力になったのは間違いないですが、そろそろあなた自身の幸せを見つけてもいいころだ」

「俺の幸せ……」

男の胸をよぎったのは、栗色の面影。
天使の森で出会ったとき、一瞬だけすべてを忘れて笑った。
先日の再会のときには、会話もできずただ追いかけただけだったのに、己の気持ちを変え、その後の王妃との関係を変えた。

「私に憎しみはないのかと聞きましたが、そりゃぁないと言ったら嘘になります。
親しい人をたくさん亡くしましたからね。
あのとき、デナーシェが手助けしてくれていたら、どれだけの命が救われたか。
でもいつまでも憎んでいても前には進めません。
許す、ということも大切なんです」

「だけどそう簡単には忘れられない」

「忘れるのではなくて“許す”んですって。
戦争に直接関わっていない者をいつまでも憎んでいても仕方ないでしょう。
過去を許し未来を慈しむ。

それを教えてくれたのはアディです。
彼女が預かっている子どもたちの中には、敵対した国の子どももいますからね」
「あの子どもたちは、敵国の子といっても俺たちと同じ被害者だろう」
「では、開戦時に三歳、終戦時であってもたぶん十八の第一王女に、戦争に関わる発言権があったとでも？
和平のために会ったこともない男に嫁がされ、たった一人の侍女だけ連れて、頼りになるはずの夫に冷たくあしらわれる彼女が被害者でないと？」
「それは……」
「和平の調印のとき、もっと高額の賠償金と、こちらに有利な商取引の条約を記した案もあったでしょう。
それをわざわざ苦労するような真似をして……。
憎しみの連鎖を作るようなことはやめなさい。
あなたが王妃と仲良くすることで、民の手本となるのです。
“許す”ことを行動で示して、民を安心させてやるんですよ」
「あの王妃相手にか」
「自分で選んだんでしょ」
「目的が、違う」
「そんなこと言ったって、結婚してしまったんだから仕方ないじゃないですか。

気が済んだから、はい、やり直し、とはいかないんですよ。
王妃様がだめなら子どもだけでも愛せばいい。
あなたと王妃との子どもなら、これ以上ない和平の象徴になりますよ」

「子どもか」

その子どもを愛せる自信がない。
ティエリーに言われた諸々が、どうにも消化できずに、ラウルは頭を抱える。

「まぁ、あの王妃もやけに完璧で大人し過ぎますけどね。
少々気になることもあるので、様子を見てはいます。
とはいえ、侍女たちの評判はすこぶるいいですし、対外的にもおおむね好感をもたれています。
とても、賢い方ですよ」

「そうだな。俺の王妃としてはできすぎている」

しかし面白味はない。

「お互いのことを、先入観なしに考えてみたらいいんです。
どうです、そろそろ夏がきますから、一緒に避暑にでも出かけたら」

内陸にあるオーレリアの夏は厳しい。
北の山奥に、以前この地を治めていた領主が建てた別荘地があり、去年、一昨年とラウルやティエリーも訪れていた。

「その時期は灌水工事の大詰めだろう」

「ですから全部は無理でも後半だけでも一緒に」

「二、三日でいいのか」

「最低でも一週間はいってらっしゃい。
それくらいの休みはあげられますよ」

一週間。
そんなに長く？

城と違い、さほど大きくはない別荘では、否が応にも顔を合わせることになる。
これまで憎むべき相手として接するか、極力関わらないようにするかしていたのに、いきなりそんなに長い間一緒にいられるものなのだろうか。

「おまえも行くか？」

「二人して城を空けるわけにはいきませんよ。
あなたの後に、家族水入らずで出かけさせてもらいますから、がんばってくださいね」

「はぁ」

有能な宰相の頭の中では、すでに日程や人数配分の調整が出来始めているようだ。
ここはあきらめて王妃と向き合ってみるか。
心を決めたラウルは、決裁を終えた書類をティエリーに渡して、次の仕事にとりかかる。

眉間のしわが少々浅くなった親友に薄く微笑んで、ティエリーは王妃の私室に向かうべく執務室を出た。

「避暑、ですか」

用件を告げた宰相に、王妃の侍女は様子を伺うような視線を向ける。

「えぇ。オーレリアの夏はたいへん厳しいので、毎年一か月ほど北の別荘に行っているんです」

「陛下もご一緒に？」

刺繍をしていた手をとめて、直接問うてきたのは王妃だ。

「はい。全日程は無理ですが、後半合流なさいます」

王妃と侍女は顔を見合わせる。

「いかがですか？」

「もちろん、喜んで」

こうして、結婚後初めての旅行が決まった。

10　別荘

深い森を背にして湖のほとりに立つ、白い別荘が見えてきた。
供も連れず、思うままに馬を飛ばした結果、予定より一日早くついた。
王妃は体調を崩したとかで、床についていた。

「微熱と、お体がだるいそうなのです。
　慣れないお城での生活に、知らず知らずのうちにお疲れがたまっていたのかもしれません。
　お夕食のときにごあいさつをしたいとのことです」

別荘の玄関ホールまで出迎えた王妃の侍女が言う。

「……無理をすることはない。ゆっくり休ませてやれ」

ラウルは、たいした不調ではないと聞き、ほっとした自分に戸惑った。
王妃の体調がなんだというのだ。
ほっとしたのは会わねばならないと気負っていたせいだと自分を納得させ、毎年使っている部屋へと向かおうとする。
すると古参の使用人が慌ててやってきて、部屋の準備ができていないと体を縮こませた。

「何、早く来たのは俺の方だ。
　散歩でもしてくるさ」

「申し訳ありません。夕刻までには整えておきますので」
恐縮する使用人に気にするなと手を振って、ラウルは荷物を預けて外に出た。
先ほど通ったばかりの門をくぐり、森と湖、どちらに行こうかとしばし考える。
避暑地とはいえ夏の日差しは容赦なく肌を焼き、汗をしたたらせる。
ならば、と木陰を求めて森を散策することにした。
小鳥のさえずりを聞きながら、森の小道を進み、より奥へと足を踏み入れる。

これから一週間、あの別荘で王妃と過ごすのか――

さわやかな森の空気とは異なる、陰鬱な気持ちがラウルの胸に湧き起こる。
義務的な夜と他人行儀な手紙のやりとりは、多少はお互いの距離を縮めてくれてはいたが、親しみだとか仲良くだとかとは程遠い。
ティエリーのおかげで、身を苛むほどの憎しみはなりを潜めていても、まだどこかにくすぶっている。

いっそ、王妃が体調を崩しているからと言って、城に帰ってしまおうか。

「そんなことしたら、ティエリーのやつに張っ倒されるな」

がりがりと頭を掻き、うーんと伸びをする。
濃厚な緑の匂いを胸いっぱいに吸い込むと、体の隅々まで清められるような気がした。

このまま、俺の胸の内まできれいさっぱり清めてくれればいいのに。
そう思いながら、木漏れ日が地面にきらきらと揺れるのをなんとはなしに見る。
すると、ふいに鳥の鳴き声がやんだ。

「？　なんだ？
……うっ」

バサバサバサーーー！
周囲の木々から鳥が一斉に飛び立ち、ラウルの目の前に茶色の野兎が飛び出してきた。

「わーーー！
ちょっと、そこのあなた、どいてーーー！」

ラウルが木陰に身を寄せるのと、キィと鳴いた野兎が矢に貫かれ絶命するのとはほぼ同時だった。

「やぁ、ごめん。
まさかこんなところに人がいるとは。
罠にかけたところまではよかったんだけどさ、捕まえようとしたときに逃げられちゃって……」

藪をかきわけ声の主が姿を現す。
森に小鳥の鳴き声が戻り、木漏れ日がきらきらと揺れる。
緑はなお濃く香り、男を包む。

先ほどまでと同じ森。
城からほどよい距離で、自然が多いのが気に入り、去年も一昨年も

訪れた別荘。
それが、彼女を見た瞬間、色を変えたような気がした。

その人は、頭についた葉っぱを払い落とそうとしたが、髪にからまってうまくいかず、結わえていた紐をほどいて、無造作に頭を左右にふった。
栗色の髪が空気を含んでふわりとふくらむ。
森の匂いとは違う、甘い香りが鼻孔をくすぐる。
額にうかぶ汗を袖でぬぐって、髪を結いなおす。
腕をあげた拍子に、以前よりずっと育った服の上からでもわかる胸のふくらみが、誘うように揺れた。

出会った時は子どもだった。
この間、ふいに見かけたとき、少女になったと思った。

彼女は、仕留めた野兎の耳をつかんで持ち上げる。
矢は急所を貫いていた。
木立の中、狙い通りだとすれば、いい腕だ。
生きるために獲物を狩る彼女は、生命力にあふれ、まぶしいほどに美しかった。

「え？　あれ？
おーい、今、人がいたよね？
まさか、熊……」

「誰が熊だ」

まだ木陰に身を隠したままだったラウルは、少女の問いかけについ顔をのぞかせて答えてしまった。

「……！　ラウル！」

少女の顔色が変わる。
しまった、また逃げられる！
そう思った男は、木陰を飛び出し必死で腕をつかんだ。

「痛っ……！」

「あ、す、すまん」

短い悲鳴とつかんだ腕の細さに驚き、手を放す。
しかしここで逃げられるわけにはいかないと思ったラウルは、少女の腰に手をまわし、その腕の中に抱きこんだ。

「……なにをする……！」

身をよじる少女は気付いていない。
逃げようとする動作が、男の腹にその胸をこすりつけるような結果になっていることに。
揺れる髪が、誘うような甘い香りを振りまいていることに。

「おまえ、なんでここにいる」

柔らかな胸の感触と、少女の香りがラウルの心臓を高鳴らせる。
今すぐにでも押し倒したい衝動と必死に戦う男は、少女が不自然に固まったことに気付かなかった。

「な、なんでって？」

「この森は王の領地だ。勝手に入っていい場所ではないぞ。

それに、なぜデナーシェの民がなぜオーレリアにいる？」

「え……あ……何、そゆこと？
えーと、あのね……」

答えを探すためか、大人しくなった少女の細い肩を、ラウルは抱く。
身をかがめてふわふわの髪に顔を寄せれば、なお強く少女の香りを感じた。

「狩りを、そう、狩りをしてて、ごめんね、迷い込んじゃって。
えと、オーレリアに来たのは」

言いながら、少女は男との間に滑り込ませた左手で、厚い胸板をぐいぐいと押す。
右手は野兎を持っているため使えないようだ。
邪魔な手を避け、ラウルが少女の言葉の先を紡ぐ。

「最近、デナーシェとの交流がさかんになってきたからな。
出稼ぎにきたのか？」

「う、うん、そう。そんなところ」

少女は男を見上げ、お愛想程度に口の端をあげる。
その間にも、抱き寄せたいラウルと身を離したい少女の攻防が、お互いの間で繰り広げられていた。
少女の腕をとらえつつ、ラウルはついさっきまでの暗い気持ちなど吹き飛んで、手の内に飛び込んできた思いがけない出会いに夢中になる。

「俺の名前を知っていたな」

「え、あの、そりゃそうだよ。
王様の名前を知らない国民なんていないでしょ」
そうか。
おまえは俺の民か。
たったそれだけのことなのに、ラウルの胸にはじわっと喜びが広がる。
ラウルの手から逃れた少女の手が、ぐいーっとつっぱろうとするのを押しのけて、頭を抱え込み撫でる。
密着した体の柔らかさが心地よく、髪は覚えていたとおりの撫で心地だった。
「ちょ……あの、やめて……」
腕の中に閉じ込められ、くぐもって震える声は、どこかで聞き覚えがあるような気がした。
が、ラウルはそれを追及するよりも、目の前の感触を楽しむほうを優先する。
頭を上から抑えるように顎をのせ、後頭部をひと撫でして結い直されたばかりの紐をほどく。
ふわりと広がった髪に指を差し入れ、汗ばんだうなじをたどってから耳の後ろを通って顎を掬いあげた。
「んん……」
すくぐったそうに首を振る、少女のしぐさが愛らしい。
「おまえの名は？

あの時は名乗り合うことはできなかったが、オーレリアに来た今ならいいだろう？
おまえは俺の名を知っているのに、俺がおまえの名を知らないのはおかしいよな」

頬を撫で、下唇を指の腹でなぞる。
うすく開けられた口が、口づけをねだっているようだ。

「リ……」

「リ？」

問いかけながらも、指は少女の髪の感触を楽しみ、目は唇から離すことができない。

「リズだ！　この変態！！」

ラウルの後頭部に衝撃が走った。
目の前が真っ赤に染まる。
野兎で殴られたと気付いた時には、男は意識を手放していた。

あぁ、またユリアに怒られる。

倒れた男を見下ろして、リゼットは頭を抱えた。
体や後頭部を撫でまわされ、つい手にしていた獲物で殴ってしまった。

なんの処理もしていなかった野兎からは、矢を抜いた場所から血が飛び出し、ラウルの髪をべっとりと汚していた。
このままでは死体のようだ。
仕方なく大きな体をずるずるとひっぱって木の幹に寄りかからせると、近くの小川で手巾をぬらし、丁寧に血を拭った。

「どうしよう……。ここに置いていくわけにはいかないよね……」

本当はそのまま放りだしていきたかった。
さっきの様子では、リゼットとリュシエンヌが同一人物とは気付いていなかったようだが、長くいれば気付くかもしれない。
それにあの指。
数年前に頭を撫でられたときには、大きな手で気持ちがいいなとしか思わなかった。
それが今日はどうしたことだろうか。
男の指が髪をすいたり首筋をなぞったりするたび、ぞくりと腰のあたりが震えた。
顔が近くて、胸がどきどきと鳴った。
もうすでに何回か、一部分だけはこれ以上ないというほど接触してきたのに、それよりも一般的な部分の触れあいが、なぜか苦しかった。

「うう……ん」

髪がすっかりきれいになって乾き、手慰みに近くの固い木の枝で矢を何本か作り終えたころ。
男が目を覚ました。

「大丈夫？　……ごめんね」

とりあえず謝っておこう。
そう思ったリゼットは、男の顔を覗き込み、謝罪の言葉を口にする。

「あぁ、いや……。俺も悪かった」

まだ半分ぼおっとした様子だったが、許しの言葉は聞いた。
これ幸いとその場を後にしようとしたリゼットだったが、がっしりとした腕が足首をつかんでいた。

「こら、また逃げる気だな」

そんなに力が入っているようにも見えないが、まったく動くことができない。

「なんだよ。名前は教えたでしょ。」

木の幹にもたれかかったまま、男が見つめてくる。
あぁ、彼の瞳は青かったんだ。
リゼットは、唐突にそのことに気付いた。
いや、今までも知っていたはずだったけれども、こんなにまっすぐに覗き込んだことはなかった。
木々の間を抜ける心地よい風に揺れる黒髪。
長めの前髪が端正な顔にかかる。
先ほどまで、血をぬぐうために散々触れたというのに、今はなんだか思い出すだけでどきどきする。
いつも夫の前にいるときは、ボロがでないようにと自分の身ぶりにばかり気にしているリゼットである。
だから、こんなにじっくり男のことを見つめたことはなかった。

「それ……リズが作ったのか」

手にもっていた矢を、ラウルが目で指す。
いきなり本名のほうでよばれて、リゼットの心臓がはねた。
店屋のおかみに呼ばれたときとは違う、なんだかくすぐったいような居心地が悪いような心地がして、リゼットは目をそらせて意味もなく矢を上下させた。

「う、うん。
買うと高いし、自分の獲物をとるくらいなら十分」

「へぇ……たいしたものだな」

ラウルは、心底感心したようにリゼットを見つめる。
目覚めてから、男は一時も少女から目を離さない。
これもリゼットが落ち着かない一因だ。

「明日も来るか」

リゼットがもじもじしていると、突然、男がそんなことを言った。
明日って、そうだ、ラウルは明日来るはずではなかったか。
いきなり森でばったり会って、気が動転していたけれど、リゼットはユリアからそう聞いていた。
だから羽を伸ばせるのは今日までと思い、森に来ていたのだ。
昨日仕掛けた罠を確認して野兎がかかっているのを見つけ、追いかけてきたらラウルがいた。

「もう来ないよ」

来られるわけがない。
避暑休暇の残りの一週間は、別荘で王（ラウル）と過ごす予定なのだから。

しかしその答えを拒絶ととったのか、穏やかだった青い瞳に剣呑な光が宿った。

「来ないとはどういうことだ。
俺に会ったからか」

はい、そうです。なんて誰が答えられるというのか。
困ってしまったリゼットに、ラウルは畳み掛けるように言う。

「ここは王領だと言っただろう。
勝手に入ったおまえは普通なら牢にぶちこまれても文句はいえないんだぞ。
あまつさえ狩りをしていたな。この森に住む生き物はすべて俺のものだ。
それを害したとなったら……」

「わあぁ、はいはい、ごめんなさい。
これ返す！　返すから許して」

本当は王妃なんだから、自由にしていいのだ。
でも今のリゼットはリュシエンヌではなく“リズ”だ。
口が裂けても、あなたの妻です、なんて言えない。
血抜きをし、下処理をして大きな葉でつつんだ野兎の肉をラウルの腹の上に置いて「これでいい？」とそろりと顔をのぞきこんだ。
しかし男は無情にも、

「許さん」

と一言言ってのけた。

「そんな……どうすれば」

「そうだな。明日も来るなら許してやる。
そこの小川を上に辿っていくと、ちょっと開けた場所がある。
そこで待っていろ」

困り果てたリゼットを楽しそうに見て言った男は、少女の髪を一房つかみ、口づける。
どくんとはねた心臓に声を出すこともできず、リゼットはこくこくと頷きだけ返して、いつのまにか自由になっていた足を精一杯動かしてその場から逃げた。
残された男は、少女の姿が消えるまでじっとその背中を目で追っていた。

どれほどそうしていただろうか。
はらりと落ちてきた葉に、我に返る。
全く変わらぬ森の様子に、夢でも見ていたような気分になった男は、上着の隠しに手を入れた。
取り出されたのは、細い糸を複雑に組んで作られた一本の紐。
彼女の髪をほどいたときに、つい仕舞い込んでしまったものだ。

「リズ……」

ようやく、名前を聞けた。
少女の髪にしたように、男はその紐に愛おしそうに口づけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9127z/

身代わり王女の恋物語（なろう版）

2012年1月10日06時47分発行